

No. 12

〒107-8655 東京都港区赤坂 2-14-27 双日(株)内 17F
URL <http://nmtkshayukai.hp.infoseek.co.jp/>
E-mail menkwa@sojitz.com

【ページ】

1

2012年度 ニチメン東京社友会総会・懇親会開催のお知らせ

恒例の社友会総会・懇親会を下記の要領で開催します。総会の主な議題は役員改選、事業報告などですが、総会後の懇親会ではお集まり頂いた方々で楽しく歓談のひとときをお過ごし願えればと思います。お誘い合わせの上、多数の皆様のご参加をお待ちしています。

開 催 日 ; 2012年 7 月 12 日(木) 12:00～14:00 (開場 11:30)

会 場 ; 「如水会館 2 階 “スターホール”」
(昨年と同じ場所です。クロークは 1 階にあります)
千代田区一橋 2 - 1 - 1 TEL. 03-3261-1101

アクセス ; 地下鉄東西線の竹橋駅下車 1b 出口より徒歩約 4 分。
または都営三田線、都営新宿線、半蔵門線の神保町駅下車 A 9 出口より約 4 分。
(白山通りの反対側に出ますが、エレベーターがあります。)

会 費 ; 2,000 円、(年会費同時の場合は 5,000 円)

出欠の確認 ; 準備の都合上、6 月 20 日までに、会報に同封の返信用ハガキにて出欠の可否をお知らせ下さい。
(後日出欠予定に変更があった場合は世話人の誰かに速やかにご連絡下さい。)

そ の 他 ; 当日は気軽な服装でお出かけ下さい。

ニチメン東京社友会 事務局
(E-mail : menkwa@sojitz.com)



2012年新年賀詞交歓会における会長挨拶

会 長 河 西 良 治



皆さま、明けましておめでとうございます。

本日は非常にお寒い中、盛大に新年会を開催できましたのも、会員の皆様のご協力があつての賜物でございます。

就中、私ども全員の心の故里である双日よりは、土橋会長、加瀬社長以下、役員・社員の皆様が、ご多忙の折にも拘わらず御出席賜り、厚く御礼申し上げます。

また、毎年このように会場のご提供、社友会へのご支援金などに対して、改めて厚く御礼申し上げます。

昨年は一千年に一度とも言われる東日本大震災による災害に加えて、復旧には四十数年を要するといわれる原子力発電所の世界規模の事故に遭遇し、未だに毎日苦しんでおられる被災者の皆様には一日も早いご回復をお祈り申し上げる次第であります。

さて、世界の政治経済情勢は欧州の sovereign risk をキッカケに混沌とした情勢が続いておりますが、ユーロの完全崩壊という最悪の事態は先ず起るまい、あと半年程度で新しい秩序整備の見通しのアウトラインが見えて来るのではないかと見る向きが多いようでございます。

米国、中国ともに金融緩和に向かっておりますし、日本も引き続いでデフレと超円高に往生しているとは言ふものの、先進国の全てが累積財政赤字国である中で、日本とドイツのみが累積経常収支の大黒字国である事実によっても、わが国の前途には大きな期待を持てる所以であると思っております。

今後、日本の得意とするハイレベルの技術面での生産性の向上と、円高をフルに活用しての海外投資の活発化など、政治の貧困による産業空洞化の早期克服による我が国の長期発展計画の樹立が切望されるところであります。

ところで、世界の総人口は今や70億人を突破し、2050年には93億人を上回ると国連が発表しており、2021年にはインドが14億人と、中国を上回りますし、殊にアフリカは現在の10億人が2100年には36億人に達すると発表されており、現在までは未だに大きく注目されてはおりませんが、有望な potentiality を感じさせる area であると思われます。

いずれに致しましても、この明白なグローバリゼーションの新世界で将に商社は最もその存在感と共に大活躍が期待される業種なることは、極めて明白でございます。

双日もアンゴラでの肥料原料プラント、ポルトガルでのレアメタル開発等々、日経新聞を賑わしておりますけれども、就中、最近ではNHK、11月21日「プロフェッショナル」という番組で、双日の片野裕課長の中国・米国のレア・アース商内での活躍ぶりが全国

放送され、ご覧になられた方も多いと存じますが、実に堂々、且つ流暢な中国語と英語でのご奮闘ぶりには誠に感動を覚えた次第でございます。

さて、今年7月には双日様は霞ヶ関の新飯野ビルに転居なさいます。誠におめでとうございます。

これを機に更なる大飛躍を遂げられますよう、お祈り申し上げます。

それでは、昇り竜の期待の大きいこの年の初めにあたり、土橋会長、加瀬社長以下、役員・社員の皆さま、そして我が会員各位の益々のご健勝を祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

有難うございました。

2012年新年賀詞交歓会における来賓ご挨拶

双日(株)会長 土 橋 昭 夫



皆様、新年明けましておめでとうございます。

おめでとう、などという言葉はあまり大きな声でしゃべり難いような、或いは憚った方がいいかと思いますが、昨年は3月11日の大震災、また秋口の関西地方を襲った台風、ということで大変な年でしたが、改めまして、亡くなられた方のご冥福をお祈りし、また、被災された皆様方に心からお見舞いを申し上げます。

大変な年だったと言う方が殆どであったかとは思いますが、考え方次第でありまして、健康で大過なく一年過ごせて本日この会に出席できているということは大変有難く、そう思うといい年であったとも言える訳でして、私はそういう風に前向きに捉えたいと思っております。

扨て、今年は選挙の年だと言われております。先週末の台湾総統選挙、3月のロシア、4月にはフランス、そして10月は中国のトップ交代、さらに11月はアメリカ、12月は韓国と、それぞれ大統領選挙が目白押しでございます。そして日本に於きましても、衆議院の任期が残り2年を切り、いつ解散総選挙があってもおかしくない、非常に流動的な政局であります。

このような年は内政に目がいき、グローバルな課題に対して政策を打ちづらい、また大きな政策を掲げて強いリーダーシップを発揮するということが起こりづらい年だと言われております。

世界経済はと申しますと、先ほど河西会長のお話にもございましたように、欧州のsovereign risk、低迷する米国経済、そして新興国の成長の鈍化、さらには歴史的な円高、株安など、問題は山積であります。

しかしながら、国内景気には明るい材料も見えてきております。

それは、復興需要でございます。

昨年の11月に12.1兆円の第三次の補正予算が成立し、さらに12月には2.5兆円規模の第四次の補正予算も閣議決定されました。

今までは復興特需という言葉だけが独り歩きしておりましたが、資金の裏付けができ、これから本格的な復興が始まり、その効果が出て来るものと期待をしております。

今年の経済見通しはといいますと、海外の景気の伸び鈍化、また円高ということもあり輸出は伸び悩むものの、公共投資が成長を押し上げ、ゆるやかに回復するのではないかと、というのが大方の見方でございます。

そのような中、当社は現在Shine2011 ― 中期経営計画を進めており、本年度は最終年度でございます。計画では、経常利益460億円、当期利益160億円を掲げており、これにつきましてはほぼ目途をつけておりますが、昨年末の税制改正に伴いまして、繰り延べ税金資産約280億円の取り崩しを余儀なくされました。

その結果、一転して120億円の赤字ということになるわけですが、期末まであと2ヶ月余り、この赤字幅をミニマイズすべくベストを尽くして参ります。

現在、4月以降の次期中期経営計画を策定しておるところでございます。

世界経済の急速な回復は見込めないこと、そして不透明な事業環境に変わりはない、という前提に立ち、引き続きDER或いはRisk Asset Controlといった財務健全性を維持しながら、計画達成の蓋然性を重視した計画を練っているところでございます。

さて、今年は辰年で、「辰巳天井」或いは「昇り龍」など、株の世界では相場格言があるようですが、今年の株価は期待を込めまして1万2～3千円と予測する方も少なくありません。

是非そうなって欲しいものだと思っています。

しかし一方で、辰年というのは非常に volatility の高い年だとも言われております。従いまして、理想に向かって辛抱強く且つ慎重に色々な抵抗や妨害と闘いながら、じっくりと歩を進めて行く、こういう年でもあらうかと考えております。

大変厳しい環境ではございますが、気持ちだけは負けないように明るく前向きに、次の来たるべき飛躍に備えまして、役職員一同精励努力して参りますので、皆様方におかれましては引き続き御支援の程よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、ニチメン東京社友会の益々のご発展と、本日お集まりの皆様方にとりまして、今年一年が幸多い年であることを心より祈念申し上げまして、新年のご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

[illegible]

ご長寿お祝い表彰会員代表挨拶

表彰会員代表 大野 久 生

大野久生でございます。

私は昭和23年の11月、学生的身でアルバイトとして日本綿花に勤め始めました。会社は近三ビルにありました。

翌年の正月だったと思いますが、当時の総務部長松本希道さんから突然「君、日本綿花の社員にならないか」と言われました。未だそのようなことをあまり考えていなかった時でビックリしまして、あいまいな返事をしておりましてところ、2月になりまして、社員の

辞令をもらってしまいました。これでは来なくてはなるまい、ということでそのまま日綿に入ったわけであります。当時は労働組合問題が色々活発だったために、慶応なら間違いなからうということで、そういう羽目になったのであろう、と思っております。



まずは経理、それから輸出雑貨の部門に配属となりました。当時の輸出雑貨というのは、陶器が主な商品でしたが、私はボールペンだとかゴム草履だとか本当の雑貨の輸出を東南アジア向けに担当しました。その頃アメリカのダウ・ケミカルからプラスチック原料を、当時の日本では真先に手掛けて輸入しておりました。これには射出成型機という機械が必要なのですが、日本では未だ名機製作所というところが小型の機械しか作っていなかったため、中型の中古機械も一緒に輸入販売しました。これが盛んになりまして、結果、

輸入の原料が毎月2－3割位ずつ増えて行くという状況となり、社員3人位でやっていたのが追いつかなくなり、私がその加勢を始めることとなりました。

それが縁となって、私はリタイアするまでの間ずっと、化工課、合成樹脂部、化工本部と、所謂化工関係から殆ど外れることなく、ニチメンの生活を送ったのであります。

このようなことから、リタイア後も非常に恵まれた生活を送ることが出来た、ということを一寸お話し上げたいと思います。

というのは、在職時代に知合った友人で日野興業というところの専務をしている男から「会社の面倒を見てくれないか、経営陣に人が少ないから」という話があって、退職後そこに行くことになりました。その会社は金物問屋で、小さいのは釘とかナット、大きくても電動工具などを扱っている金物問屋だったのですが、商品がありすぎて回転が悪く、赤字を出していたのです。その友人が、鉄板をプレスして加工する機械を持った工場の責任者をしていました。そこで作っていたのが、食事を前にして申し訳ありませんが、仮設トイレでありました。全国十数か所に支店、それから代理店を東京などは数社持っておりまして、製品はレンタルと販売の両方をしていました。私はその鉄板による仮設トイレを見まして、これはもう樹脂で全部やれるものだ、と直感が働きました。樹脂なら、先ず部品点数が減る、それから組立てが簡単で軽いので運搬がし易くなる、設置も楽に

なる。それから回収後の掃除も楽になる、更にもう一つ、樹脂で作れば量産が可能である、しかも安くできるだろう、良いことづくめだと思った次第です。そこで便槽を、取敢えず幅1メートル50、長さ2メートル弱、高さはステップを含めて約30センチ位の、そういう製品を中空成型という方式、あのペットボトルを作るのよりももっと大型の 中空成型機で成型することにしました。これが一発で出来るわけです。

実際にこれを始めたところ、大変な好評を得ることが出来たのです。

ただ問題は、耐熱性が弱いということでした。太陽が照りつける40度近いところで何日間も放置されるわけですから、早く劣化するということが気になりました。この問題を解決する方法として、中低圧のポリエチレンを原料として作ってはどうかと考えました。

そこで、当時、ニチメンの合成樹脂部と一番深い関係のある旭化成に人脈もあったので、部長と掛け合っ、て、そうした原料を特注して、いわゆる耐熱性の強い、しかも、硬度のある製品を作ることが出来て、一応これも巧く行きました。

そういうようなことで、毎月1,500棟から2,500棟、金額にして1億5千万円から2億5千万円ほどのものがニチメン経由でニチメンが原料を加工屋に出す、製品はニチメンを 通して日野興業が買う、というような径路で、非常に喜ばれたという経験をしました。

これでいくらかニチメンに恩返しが出来たのではないかと自負しております。

現在、天気であれば毎日散歩をしているのですが、新しい建設現場を見つけると必ず覗きに行きます。どこの製品かな、うちのかな、などと我々が苦労して作った仮設トイレがあると大いに嬉しくなって喜んでおるわけであります。

私ごとを長々と喋りましたけれど、これで挨拶とさせていただきます。

どうも有難うございました。

2012年度新年賀詞交歓会報告

世話人 塚 本 幸 雄

欧州のユーロ不安の中、野田改造内閣がスタートした直後の1月16日(月)に ニチメン東京社友会による2012年度第五回「新年賀詞交歓会」が双日本社西館大会議室にて開催されました

今年は特に寒さが厳しき折柄、出席者は如何ほどかと思案していましたがものの当日になり社友の皆さんが続々とお元気にご参集され 昨年とほぼ変わらぬ125名の方々が出席されましたことには世話人一同安堵した次第であります

開会前から彼方此方で早くも談笑の輪が幾つも出来上がりムードも盛り上がった定刻の12時に総合司会の塚本による開会の挨拶に続き、司会アシスタントの小堀裕子さんの紹介で先ず河西良治会長による新春のご挨拶があり、内外経済の動向にも触れられた格調高いものでありました

次に 来賓の方々からは土橋昭夫双日代表取締役会長からご挨拶をいただきましたが いつものごとく明快にして闊達な切れ味鋭いスピーチを拝聴すると共に双日役員の紹介がありました

引き続きご長寿の会員の御祝いでは米寿・白寿計七名様の表彰があり 代表の大野久生さんのご挨拶では入社時のお話から始まって在籍中のお仕事のエピソードも縷々述べられた次第です

12時半になり愈々 島崎京一副会長のご発声で乾杯の儀。

島崎さんも、お話しの中であつたのニチメン・ソウル支店現地スタッフとの思いがけない出会いに感激されたことなどが披露されました

乾杯を合図に 歓談、食事の時間となり右を見ても左を見ても 懐かしい顔懐かしい声。白頭は益々薄しの方々が多く見受けられましたが お元気にご出席されたことは誠に喜ばしくあつという間に時間が過ぎてしまい、予定の1時半には世話人代表の倉又則夫さんによる中締めにより行事を無事終了する運びとなり2時には再会を約し散会となりました

最後になりましたが、会場を提供していただいた双日本社と設営にご協力して頂いた皆さん 特に司会役の小堀裕子さんにはいつもながらご尽力に厚く御礼申し上げます 有難うございました。



2012年(平成24年)1月16日(月)開催 賀詞交歓会 出席者

(敬称略)

あ	浅	井	正	彦	さ	坂	井	良	司	は	植	生	榮	勇
	浅	子	豊	治		桜	井	潤	一		浜	口	信	恭
	朝	倉	重	道		佐	々	俊	郎		林	林	正	弘
	新	崎	盛	晨		佐	木		弘		半	岡	義	人
	幾	島		清		佐	原	悦	三		廣	田	太	享
	池	田		格		三	藤	統	次		廣	本	雄	郎
	石	澤		一		洪	一	克	美		福	富	昌	也
	石	川		保		島	谷	京	義		藤	野	直	明
	泉			夫		清	崎	武	一		古	谷	泰	三
	伊	藤		雄		管	水	利	人		本	間	登	章
	今	村		昭		杉	沼	好	郎		牧	山	洋	雄
	岩	田		利		彬	浦	佳	治		桝	尾	俊	生
	大	北		子		須	本	郁	久		松	嶋	憲	次
	大	塚		良		陶	定	忠	夫		三	野	敏	一
	大	野		生		曾	藤	宏	昭		水	江	英	夫
	大	森		作		高	山	亨	晃		溝	浦	博	幸
	大	山		雄		高	我	恒	司		宮	井	靖	三
	大	村		夫		高	尾	允	勝		村	江	健	博
	大	田		久		高	木	秀	一		森	島	一	武
	大	野		次		高	木	泰	久		矢	口	浩	児
	大	西		子		高	木	昌	宏		山	本	陽	孝
	大	西		夫		高	木	幸	子		山	邑	秀	光
	大	沢		治		田	瀨	慎	雄		山	海	ち	郎
	大	木		郎		塚	田	舜	治		山	川	重	一
	大	西		勲		利	野	十	一		山	弘		造
	大	木		已		中	村	吉	郎		山	辺		浩
	大	西		彦		中	川	宣	夫		山			よ
	大	畑		三		中	村	和	英		山			幸
	大	崎		徳		中	谷	捷	子					
	大	池		子		滑	川	昭	男					
	多	嶋		明		成	見	照	郎					
		津		夫		南	部	松	男					
		城		雄		西	村	惠	男					
		又		彌		西	村	信	弘					
		持		路		庭	野	春	三					
		田		勝		野	村	俊	子					
		野		幸		芳	賀	和	明					
		西		助		橋	爪		覚					
		林		二		長	本		彦					
		島		穰		花	川		洋					
		月		治		花	崎		雄					
		井					澤		郎					

(註) (*)印は受付支援等で運営に協力頂いた一般会員。



2012年新年賀詞交歓会 懇親会風景



お願い：

2011年度会費を未納付の方は当年度中の納付に協力下さい。

2010年度分未納者は大至急2011年度分と合わせ納付頂きますようお願いします。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行

口座番号：00100－4－318041

口座名義：ニチメン東京社友会

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めに記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されない場合があります。)

2) 三菱東京UFJ銀行東京営業部

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会 代表 倉又則夫

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させて頂きます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務局までご連絡下さい。

なお、新年会にて7名の長寿者の紹介を行い現在は28名になりますが、会費の免除対象者には12年度会費からになります。

(註2) 長寿者氏名：(50音順敬称略)：

石川勝美、井本公一、岩井宏一、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、加藤信一郎、門松孝、上条達雄、川崎清、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、佐藤信世、椎木与志也、鈴木明、鈴木邦治、西尾敬一、西田啓一、藤田一郎、古川熙、松田好生、望月昌徳、山木重貞、山口富治、山口富美子、山口良孝

以上28名

(註3) 2012年度(2012. 7～2013. 6) 年会費納入済会員(50音順敬称略)：

赤間智明、浅井正彦、浅子豊治、浅利真司、荒木武雄、石井光雄、石井幹夫、今田時男、岩下恒則、浮貝康匡、海野敏夫、大塚静子、大野久生、大森啓作、河西良治、金沢英雄、鏑木順治郎、亀田昭、唐崎和彦、木村敬雄、久芳成、窪田厚三、黒川智水、黒住厚、桑島有一、五島慎二、小林齊之介、齊藤勝義、佐藤鐵雄、島崎京一、島田俊彦、下浦通洋、白坂泰之、新藤孝、陶山晃、高尾勝、竹内可能、田所忠彦、田中清、田中孝平、土屋秀雄、土橋勇、中川十郎、中島和彦、中村静人、南部晴雄、西川周、西川洋、西田啓一、西野幸夫、平井出良彦、平岡昭三、福井芳樹、堀江亘、前田孝、牧洋生、松坂茂、松崎利夫、丸山修作、三島敏夫、村尾毅

以上61名(他に会費一括払いの終身会員1名)

訃 報

(平成23年11月10日～24年5月9日)

ニチメン東京社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
山 上 敏 夫	不 明	平成23年 5月24日	96歳
内 藤 謙 二	木 材	平成24年 1月20日	100歳
太 田 昭	社長室(役員)	平成24年 2月 2日	85歳
前 田 進	機 械	平成24年 2月 6日	75歳
※佐 藤 光 雄	鉄 鋼	平成24年 4月11日	75歳
※村 上 欣 也	機 械	平成24年 4月20日	77歳
植 木 弘 政	化 工	平成24年 4月21日	72歳
今 村 豊 昭	食 糧	平成24年 5月 9日	82歳

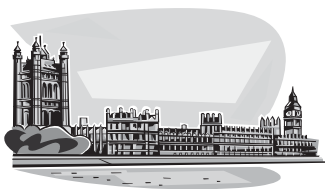
ニチメン大阪社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
※山 田 勝 治	不 明	平成23年 1月31日	97歳
※佐 藤 灘 雄	機 械	平成23年10月 4日	91歳
荒 木 道 介	織 維	平成23年12月10日	80歳
青 木 寛	織 維	平成23年12月16日	80歳
津 村 三 良	化 工	平成24年 1月18日	88歳
的 場 政 市	織 維	平成24年 1月28日	70歳
高 木 秀 明	機 械	平成24年 2月 6日	82歳
田 中 か ず	看 護 師	平成24年 4月15日	98歳
嶋 津 泰 輔	静岡支店	平成24年 4月17日	67歳
中 林 茂	通 信	平成24年 4月19日	87歳

※ 非会員



ご冥福を、お祈りいたします。合掌



第13回ニチメンチームズ会報告

漆 崎 隆 司

2011年10月28日（金）夕刻、慣例により銀座7丁目「高松」にて開催、集まったのは以下のお元氣な諸兄でした。（順不同敬称略）

泉 伸夫、笠井 公雄、河西 良治夫妻、桜井 潤一、島村 健雄夫妻、須藤 忠昭、大工原 正徳、田尻 眞啓、中谷 宣英、中谷 勝、廣岡 幹雄夫妻、古澤 陽一、松田 実、吉本 邦晴、漆崎 隆司、渡辺 重幸（総勢19名）

河西郁夫さんの呼びかけで始まった伝統ある当会は、登録メンバーが50名を超え、毎回30人前後の出席者で脈々と続いて来ましたが、今回は都合がつかないメンバーが多く、やゝ少なめの19名が集まりました。

松田会長の挨拶と廣岡（幹雄）さんの乾杯で始まり、懇談に入りました。近況を伝え合うことから東日本大震災の話、はたまた景気鈍化、経済の将来像やグローバル人材育成への要請、若者の内向きを嘆くなど談論風発。幹事指名による楽しいスピーチ等もまじえ、瞬く間に時間が経っていきました。また、幹事からは今回はからずも不参加となった下記メンバーからのメールや葉書きによる近況報告が紹介されました。（順不同敬称略）

秀真 正彦、関根 潤治、高木 恒久、並木 勝詮、大和田 忍、山田 博一、沖本 達也、小川 宇士雄、作部屋 義彦、田中 長典、岡島 岩男

特に山田（博一）さんからは、9月に奥様を亡くされたとの悲しいお知らせがありました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

当会では年2回有志によるゴルフコンペを春と秋に開催しており、前日の10月27日（木）に第18回秋大会が行われました。参加者は9名で平均年齢は71.66、但し60代前半の古澤／佐竹（丈夫）両氏が平均年齢を引き下げてくれており、他7名が歳のわりには頑張っております。今年は永らく金沢で大学教授を務めてこられた園山（春一）さんが東京に帰って来られることでもあり、一層楽しい会になること間違いありません。もちろん飛び入り参加を歓迎しますので、万年幹事を引き受けております吉本（晴彦）さん又は漆崎まで連絡をお願いします。

さて、7月はロンドン・オリンピック開幕です。開会式が行われるロンドン・オリンピック・スタジアムはロンドンの北東Stratfordに建設中のオリンピック・パークの南西側にあり、元ニチメン事務所があったシティ東端からも遠くないところにあります。ドッグランドから地下鉄ですぐのところ。各種競技会の会場はロンドンを中心に東西に散らばっています。当会のメンバーの中にはセンチメンタル・ジャーニーとオリンピック観戦を兼ね、近代的に変貌したロンドンを観に行かれる予定の方もおられるでしょう。日本から押しかける数多くの旅行者も予想されており、PUBで泡の出ない1パイントのビールとフィッシュ・アンド・チップスを堪能（？）される人達も多いのではないのでしょうか。日本選手、特になでしこジャパンの活躍に期待したいところです。



最後に、この第13回会合において、松田会長より世話人の改選の提案があり、新しい会長に漆崎、幹事に渡辺（重幸）さんが推薦されました。まさに Out of the blue ではありませんでしたが、両名はこれを謹んでお請けすることになりましたので、今後ともよろしくご協力のほどお願い申し上げます。同時に、5年の長きにわたりご苦労頂いた、松田会長と古澤幹事に心から感謝申し上げます。

盛会のうちに予定の時間はあっという間に過ぎてしまい、次回も同じ時期に開催することを申し合わせたうえ、中締めと閉会の辞があって、午後8時頃に散会となりました。

ニチメン東京鐵鋼輸出OB／OGの集い

花 澤 和 郎

平成16年（2004年）9月に、呼びかけ人：鈴木悠さん、三枝伸さん、津田賢一郎さん

事務局：福本匡純さん、山本大吉郎さんが結成されました。第一回の集いを開催するに当たり、名簿作成が一大事業でしたが、故黒部和子さんの多大なる貢献により198名（男性：131名、女性67名）の名簿が作成されました。女性幹事団：黒部和子さん、山田富枝さん、小島（山本）栄子さん、川合（木原）益美さんの手助けにより案内状を出状、その結果65名出席（男性：46名、女性19名）の下、平成16年11月24日に第一回の集いが鉄鋼会館で開催されました。その後お互いの健康を確認しあい旧交を温めることを趣旨として毎年11月に開催し、今年で第九回（11月17日）を迎えます。会の運営は懇談を中心に、ビンゴやカラオケをしたり、今までに阿賀信夫さんの手品の披露、廣安徹さんのフラメンコギターの演奏、藤井正之助さんの高野山隸書大会特選の書の披露、柴田實画伯の水彩画の披露等がありました。毎回あっという間に二時間半が過ぎ、二次会へと流れて行きます。

これまでの出席者数の推移は下記通りで漸減傾向にありますが、出来るだけ長く続けていく所存です。

第一回	平成16年（2004年）11月24日	男性：46名、女性：19名	計65名
第二回	平成17年（2005年）11月26日	男性：40名、女性：18名	計58名
第三回	平成18年（2006年）11月18日	男性：30名、女性：18名	計48名
第四回	平成19年（2007年）11月17日	男性：34名、女性：23名	計57名
第五回	平成20年（2008年）11月15日	男性：32名、女性：15名	計47名
第六回	平成21年（2009年）11月14日	男性：28名、女性：16名	計44名
第七回	平成22年（2010年）11月27日	男性：23名、女性：9名	計32名
第八回	平成23年（2011年）11月26日	男性：26名、女性：12名	計38名

出席者（敬称略）

男性：阿賀信夫、井上洋右、岩橋宣之、牛久保豊、大北克利、大崎隆三、小山繁、金山文彦、金城弘明、五島慎二、三枝伸、柴田實、杉浦幸雄、高野泰雄、津田賢一郎、中島茂弥、中西真佐裕、花澤和郎、林博之、廣安徹、松崎多賀司、三船弘雄、村上幸史、山本大吉郎、吉川浩、餘野木茂
女性（旧姓）：浅井（浅井）さく代、入沢ひろみ、岩崎（木戸）孝子、間宮（奥川）富子、川合（木原）益美、小島（山本）栄子、清水（吉富）裕子、下川泰子、高橋（中島）令子、宮坂（坂本）悦子、山田富枝、渡辺（奥川）恵子

OB／OGの集い発足以来鬼籍に入られた方々：

加藤智弘（2005年）、黒部和子（2006年）、河口輝夫（2006年）、林健太郎（2007年）
大崎隆平（2008年）、五十嵐敏（2008年）、小泉正康（2010年）、柴田豊（2010年）
野村（石松）君子（2010年）、佐藤光雄（2012年）

ニチメン京都OBの集い

辻 井 準 一

ニチメンOB数多ある中で、現在、ここ千年の都に居を構えるニチメンOBは約十名を数える。大阪社友会に属するものの京都OB会として、折々に集まっては、ニチメンWallahとしての紐帯で、会合を楽しんでいます。

京都のOBには、二人のプロはだしの中村吉夫Photographerに、藤田康弘画伯がおられます。

お二人ともニチメンで営業のスタートはOS繊維機械課であったのも偶然か。
時々、個展をやられるので吾らは挙って出かけて行きます。
お懐かしい佐草茂男さんもお仲間に入られました。
双日で要職を務められた岡崎謙二さんも本会では、まだ若手OBです。

この4月19日、少人数だったが、市内の台湾料理『青葉』に集まりました。
その日の写真茲許添付：



【写真 左から】 藤田康弘（織機・PS）、佐草 茂男（綿糸布、BM、PSR）辻井準一（機械、CG）、岡崎謙一（双日役員）、田中雅敏（名古屋・機械）

尚、他メンバーは ； 高木靖雄（GHQ）、井上行芳（織質）、福井大作（織内）、小上馬照雄（織質）、のみなさん。

俳句の会「いろは句会」

宇 治 田 薫

I. 句会のその後：

誠に悲しい事乍ら本年二月二日、太田昭主宰が急性心筋梗塞で急逝されました。近親者による密葬とされた為、二十三年間もご指導頂き乍らご仏前にお別れ出来ないまま甚だ残念な事となりました。然し、ちょうど三・七日にあたる二月二十二日開催の句会を追悼句会として、会場で一同揃って御霊に黙祷を捧げ、ご生前賜りましたご恩への感謝とご冥福をお祈り致しました。

今回は通常の俳句ではなく、以下の通り太田昭主宰に対する会員一同の思いを込めた追悼句を掲載する事と致しました。

尚、ご葬儀の際、ご遺族が霊前にお供えされた太田昭主宰ご自身のお句は、次の通りでありました。

総持寺の鳩舞ひ納め秋夕焼
雪道を来て温泉に手足伸ぶ

I. 一同の追悼句（アイウエオ順）：

ありし日の追憶果てぬ寒夜かな 万感の胸に迫りて冴返る	(宇治田 薫) "
昭大人逝きて此岸に寒戻る 笑みたたへ大人独り往く花菜道	(太田 琢也) "
如月に句帳遺して旅立たれ 句友会えにし深めて冬の旅	(久保田悦子) "
春の野や師の穏やかな案内声 この道は師と来し道や梅見頃	(三枝 一希) "
春待たで黄泉へ立たれし師を悼む 句会終へ寒夜手を振り去られしが	(笹原 弘) "
鬼やらふ豆残されて逝かれけり 立春を待たず長途の旅につき	(佐藤 秀隆) "
ありし日の師の暖かさ偲びけり 鎮魂や鶯鳴かず飛び去りぬ	(下川 泰子) "
宗匠と巡りし春のテムズ川 師を偲ふ秩父の嶺もかすみをり	(須藤 忠昭) "
尊師逝く寒梅匂ふ早暁に 冬星の輝き止まず吾が標	(塚本 幸雄) "
追憶は涙の器別れ雪 歳時記の春の部開き旅立たれ	(福島 有恒) "
亡き師匠を茶房に待ちし浅き春 千の句に思ひ残され逝く二月	(藤野 徳子) "
あきらさんと呼ばせて下さい浅き春 春来れば出席すると言はれしが	(若月 義和) "

以 上

OB会開催情報

OB会名	開催日時	開催場所	連絡先
ニチメン慶応会	6月23日(土)11:30～	慶応義塾 三田キャンパス 南校舎 3F「萬来舎」	岡島 岩男
ニチメン東京化工OB会	10月19日(金)18:00～	東 洋 レ ス ト ラ ン	栗田 久彌
ニチメン機友会	10月20日(土)12:00～	八重洲富士屋ホテル	五月女 穰
ニチメン東京鉄鋼輸出 OB・OGの集い	11月17日(土)12:00～	アイビーホール青学会館	花沢 和郎

[illegible]

nmos nmos 大阪社友会ニュース短信 nmos nmos

編輯部

大阪社友会（会長；田淵弘通）は、2012年度恒例の“互礼会”を新年明けて1月11日に、お馴染みの会場：太閤園にて開催。

出席のOBは166名を数え、大盛会。

双日(株)来賓として土橋昭夫会長以下9名の方々がご来場された。

田淵会長の挨拶に続き、双日・土橋会長のご挨拶は、いつものごとく切れ味鋭い名スピーチであった。

当日、田中義巳元社長はじめ早瀬三郎大先輩ほか大勢の方がたの御参加がありました。

ご長寿お祝いに対する答礼の辞は、若住昇さんが述べられた。

予定時間をオーバーしたものの、内容は充実していて好評でした。

ことご長寿お祝いの対象者は11名。 来年は、白寿の方が出てきます。

ご報告

東日本大震災被災者への義捐金

昨年の総会当日に会員各位からご寄付いただきました義捐金（6万5千円）は、当会予備費を加え10万円とし、あしなが育英会の東日本大震災・津波遺児の奨学金支援として寄付いたしました。

本年もあしなが育英会へ寄付を継続していきたいと考えております。総会当日に改めて会員各位の寄付をお願いいたします。

皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

インド 雑 感

高 尾 勝

昨4月18日、Jetro東京でインドKarnataka州政府（州都バンガロール）による投資セミナーが開催され出席した。インドが中国に並ぶ投資先として大きく浮上し連日の如く新聞にインド関連記事が掲載されるようになり、インドと40年余に亘って付き合いしてきた私は本当に昔日の感を抱いている。因みに、私は平成7年にインド・アジア開発なるコンサルタント会社を設立して、ボケ防止程度の仕事をしており2011年は2回訪印している。

思いつくままにインドのことを書いてみます。

●経済発展面

大雑把にいうと、現在のインドは、右肩上りだった昭和30年代末の日本の状況に相当し、この1－2年間の変化は加速的で過去の10－15年間に匹敵すると云われております。

過去10年間のインドの変化について極々簡単に触れますと；

*人口は過去10年間で日本の人口の2倍である
2.4億人増えて12.4億人になりました。

24歳以下の人口が54%を占めており、市場としての将来性を示しております。

*経済規模を表す名目GDPも10年前に較べて1兆ドル増えて、1兆4000億ドルになり、外貨保有高は約7倍の3000億ドル弱、外国からの直接投資は15倍の年額300億ドルになっております（1991年経済自由化以降、外国からの直接投資総額約1600億ドル）。

*往復貿易額は9倍の約7000億ドル、粗鋼生産量は2.6倍の7000万トン、IT売上高は7倍の800億ドル、乗用車生産も4.5倍の230万台超、携帯電話保有台数に至っては何と450倍の9億台弱になっております。

（固定電話設置数は1億台弱、農村部への配線インフラ難が携帯電話普及を後押し）

*日系企業数は1994年時点で僅かに59社でしたが、2000年以降急速に増え始め、2006年年初時点で247社、2008年年初には559社、2009年年初636社、2010年年初725社、2010年10月時点で812社になっております。

2008－2010年の3年間で262社増えております

が、中国での日系企業2万社日本人10万人には遥かに及びません。インドにおける日本人駐在員は約4,500人で韓国人駐在員1万人の半分以下です。

最近のインドの変化は他国のように何十%と云うものではなく、多方面で数倍から何百倍というレベルであり誠に脅威的です。



ニチメンの永年の取引先；ムンバイMirani一族の歓迎会にて《左から4人目に筆者》

●インドに於ける日本の地位

榮枯盛衰は世の常とは申せ、日本の地位は芳しいものではありません。時代が変わりつつあるが、いまだに日露戦争がアジアを目覚めさせた日本に敬意を払い、チャンドラ・ボース率いたインド国民軍の兵士への敬意を示す、インド。

1970年前後、インドの往復貿易額約200億ドル中、日印貿易額は約10%20億ドルでしたが、現在でも貿易額は約50億ドルに留まっており、世界一の親日国インドでの日本の地位が低下してしまい、中印貿易額約200億ドルの足元にも及びませんし、韓国にも抜かれております。

羹に懲りて膾を吹く、肌が合わない、さまざまな理由がありましょうが、長年の日本側の無関心の結果であり、捲土重来には時間がかかりましょう。

●インド社会は余り変わっていない

1991年の余儀ない事情から経済改革が始まり、インドの経済力が雄飛したことに疑問の余地はな

いが、いまだに左翼は頑迷に経済改革に反対しており、多くの国民の意見も多様であり、政治的分野では全面的に失敗してきている。経済改革は経済成長、繁栄、国民当たり所得増と生活水準向上を齎したことは明らかであるが、その果実が大衆の間で、或いは地域の間で広く分配されていない。経済改革の主役たちは改革命題を狭いものだけに限り、貧困者たちのコンセンサスには無関係なものになっている。

電気・水道の無い村落は無数に存在するし、政府は極貧層は国民の3割を切ったとするが、積み残された人々が多い。因みに極貧層とは中央計画委員会が基準を発表するが、2012年3月19日発表基準では都会部では家族一人当たり日収がRs28以下の家庭(¥45)、地方ではRs. 22以下(¥36)とされた。

●インドの対外関係

つい先日パキスタンのザルダリ大統領が日帰りでデリーを訪問したが、ムシャラフ前大統領の訪印から7年振りであった。長年に亘る犬猿の仲パキスタンのカシミールに関する要求は喉に刺さった棘だが、インドはカシミールの統治を着々と進めており、インド側から見ればタリバンの存在が極めて厄介だと思われる(タリバンはアフガンでのインド権益にも破壊工作をしているし、インド領域への自爆テロの恐怖)。

インドの最大関心事はやはり中国である。英領インド時代の1914年に英・西藏間で国境画定したマクマホンラインを中国は認めておらず、1962年の中印戦争後も国境紛争は頻発している。

中国はパキスタンに海港を建設して租借し、ビルマのインド洋を望む地域に雲南直通鉄道建設を進めており、中国はインド包囲網を目指している

とインドは推測しているようで、ことある度に論じられている。

印度洋を窺う中国に対する軍備の整備は中々進まない状況ではあるが、今年4月初めにロシア製原子力潜水艦1隻を取得し世界で6番目の原子力潜水艦保有国になり、国産原子力潜水艦も2年後には完工する予定だし、大陸間弾道ミサイル・アグニ5(射程5000km)の発射実験のこの数日に行われる予定。

参考までに中印海軍力比較表を下記する：

	印	中
航空母艦	1	1
在来型潜水艦	15	60
原子力潜水艦	1	6
水上艦	21	78
(フリゲート&駆逐艦)		
油槽船	4	5

●ニチメンのインド遺産

ニチメンが築いた商榷中、現在残っているのはインドの由緒ある中堅財閥Chowguleとの海塩商内だけで双日ムンバイ店が引き継いでいる。ニチメンと日岩合併時にニチメンは合併会社の持株を手放したようで、双日ムンバイはMirani Familyとの取引関係全く無し。Bhuva Familyとの合併会社「インド日本ケミカル」「インド日産ケミカル」は倒産し経済人としてのBhuva Familyは没落した。

2010年11月、訪ムンバイ時Mirani一族約20人が集まって歓迎会を開いてくれ、翌日嘗ての合併会社India Gelatin & ChemicalsをGujarat州に訪れた。嘗ては中間原料Osseinを製造して写真用ゼラチンメーカーに納入していたが、Ossein生産量を大きく増やしつつ最終製品ゼラチンまで製造するようになり、ゼラチン販路も薬用、食品に広げたので写真・フィルム業界没落の悪影響を免れて順調に運営していた。

Bhuva Familyの場合、輸入代替企業として統制経済に安住して経済自由化対策を怠り、加えて4人兄弟が仲間割れして嘗ての合併会社が倒産した。経営者次第だな、と実感した次第。

以 上



Miraniファミリーのレイディーたち。

「メメント・モリ」と「死の舞踏」

竹 内 可 能

「メメント・モリ」、日本語なら「死を想え」か「死を忘れるな」ということになるが、私は以前からこの言葉の発する響きに、何故か哲学的と云うよりも優しげで euphoric（恍惚的）な感じさえおぼえてきた。

私の友人の教えるところでは「メメント・モリ」という言葉はラテン語の綴りなら「memento mori」と表記されるらしい。しかし現代の英語にも memento mori といった単語が同じ意味あいでも使われているところを見ると、おそらくは古代ギリシャ・ローマの時代からその概念は連綿として伝えられてきたものと考えられて懐かしいのである。

もっともこれは私の想像の範囲だがこの言葉の発祥地というならば、それはローマではなくギリシャであることはまちがいのなかろうと思われる。何事にも現実的で実際的なローマ人にこのような抽象的で哲学的な発想が生まれるはずがないからである。ギリシャ語ではどんな言葉で表されるのか知らないが、プラトンやソクラテスならずとも、古代ギリシャ人なら「死を想え」なんていかにも好んで使いそうな表現である。

それはさておき、以下は私奴こと自称素人歴史探偵が挑もうとする、古代ギリシャ・ローマと中世ヨーロッパの「メメント・モリ」論である。

ローマの凱旋式での「メメント・モリ」

これまで読書のなかでなら私が「メメント・モリ」という言葉に出会ったのは何度かあったはずだが、なかでも忘れられないのが塩野七生氏の「ローマ人の物語」の中でのことであった。実はその場面で実際には「メメント・モリ」という言葉は使われてはいないのだが、それが実質「memento mori」以外の何物でもないという発見、それを読んでいて私こそ第一発見者であるかもしれない、そう思うとわれながら興奮してしまったのである。一体どういうことなのか以下に私の解釈をご披露したい

作家塩野七生氏が巻末の「ローマ世界の終焉」の中で語る皇帝ホノリウスの、ローマにおける凱旋式（西暦404）のことである。時は歴史上に名

高いゲルマン民族の大移動期、テオドシウス一世によるキリスト教の国教化（380）や、それに次ぐ帝国の東西分裂（395）、そしてやがて帝国の滅亡（476）を前にしていた落日のローマ時代のころであった。作家が小見出しに「凱旋式」と題して記すところを、ここに再録して引用したいので少々長くなりはあるが、肝心なところと思うゆえお付き合い願いたい。繰り返すようだがローマが多神教世界からキリスト教国家に変身した後の凱旋式のことである。

「帝政時代に入ってから、首都ローマで挙行される凱旋式で主役を務めるのは、勝利の功労者が別にいたとしても皇帝と決まっていた。ローマ全軍の最高司令官は、あくまでも皇帝であったからだ。西暦404年の秋に挙行された凱旋式でも、従者の御す二頭立ての戦車に乗って道の両側を埋める群衆の歓呼を浴びたのは、皇帝のホノリウスであった。

しかし、凱旋式とはローマ特有の祭典であって、それゆえにローマ人の伝統と深く結びついている。キリスト教の側から言えば、異教色が強すぎるということだ。本来なら凱旋式自体がキリスト教国家と矛盾するはずだが、民衆は凱旋式となると熱狂した。それで、キリスト教国家になって以降も凱旋式は残したのだが、それ以前とは色合いが異なるものに変えたのである。

まず白馬4頭を凱旋將軍自ら御す、というスタイルは完全に消えた。また、馬は白馬ではあったらしいが、4頭ではなく2頭立てに変わったようである。そしてその2頭も、従者が御するのが通例になる。また凱旋將軍が顔を赤の顔料で塗るやり方も消えた。顔を赤く塗るのはローマでは神であるとの表現で、その日一日だけ凱旋將軍は、敵を破ることで人々の安全を守った功績で「神」になったという意味を表していたのだ。

しかし、一神教であるキリスト教の下では、たとえ一日にしろ、唯一神以外の神の存在は許されない。だが、この「一日だけの神」を廃止したことで、以前は民衆の歓呼に応える凱旋將軍のすぐ背後に立って、「死すべき身であることを忘れるな」とのささやきを繰り返す奴隷の存在も消えた

のである。一日だけにしろ「神」にしておきながら、同時に「人間」である身を忘れるなという、この微妙なバランス感覚こそがキリスト教化する以前のローマ人の特質であったのだが、ローマも、そのようなバランス感覚は必要とは見なされない国家になっていたのだ。……」ここでの作家塩見七生氏の感慨は、キリスト教化する以前のローマ帝国が、戦勝を祝う凱旋式の馬上においてさへ皇帝に向かってささやく奴隷の言葉には、たとえそれが儀式であったとしても、勝利に酔いしれる皇帝が己を神と見ることを許されるのは、この一日だけであるとの戒めを呪文のようにして織り込んでいた、往時のローマの政治的良識・バランス感覚にたいする作家の讃嘆であったろう。そしてそれにも拘わらず、畢竟するにキリスト教化後のローマが、その市民の良質な「エートス」ともいうべきこれらの特質を失ってゆくことへの、無念と鎮魂だったことがうかがえるのである。

そこで私はといえば、勝手に引かせていただいた下線の部分、すなわち「死すべき身であることを忘れるな」という皇帝に向かって発せられる奴隷の“呪文”（言葉）が、実際にこの儀式でどんなラテン語で表現されたのかはともかく、中身はまごうことなく「メメント・モリ」と同義の言葉であることを確信して、私はいたく興奮した次第であった。

そして私もまた、多神教時代の古代ローマが、こうした儀式の上の奴隷が発する呪文のような言葉にさえ、哲学的で且つは政治的な戒めをこめながら、ひたすら帝政が独裁に陥ることの危険を阻止しようとした、その現実的な姿に重ねて感銘を禁じえなかったのである。

廃墟ポンペイの街の「メメント・モリ」

「memento mori」、この言葉が一躍世界的に有名となったのは、まちがいなくヴェスヴィオ火山の大噴火（西暦79）で埋没した、古代ローマ時代の町ポンペイの遺跡発掘だったろうと思われる。掘り起こされた建物の壁の落書きに、なんともはや、はっきりと「memento mori」というのが記されていたのだ。

当時世界中がこの遺跡の発見に驚愕したのはもちろんだが、とりわけ人々を驚かしたのは、地中海を内海としてパクス・ロマーナをくりだす古代ローマの、富と文明のまぶしいばかりの再現であった。しかし同時に、その文明がもたらしたと

思われる飽食と頹廢の痕もまた生々しかったといえようか、売春宿の存在や春画の数々が如実に語りあかすところではある。

そうした文脈のなかで落書きの「memento mori」が意味するものは深長である。先に述べた隆盛の都市国家ローマの市中なら、それは市民が見守るなか皇帝による凱旋式の戦車上の儀式として、奴隷の口を借りてまでの皇帝の独裁を諷める呪文だったが、さて同じく繁栄の絶頂期にあったはずのポンペイの街に住みついた落魄の詩人ならば、持っていき場のない鬱憤に自戒をこめて、壁に「memento mori」などと書きなぐったとしても不思議はなかろう、というのが私の想像である。

何はともあれ同じ古代にありながら、元はといえばギリシャ人が発想した哲学か美学とも思われる「メメント・モリ」を、ローマ人が政治の世界や実社会において、戒めや警世の言葉として用いているところに、これまたいかにも現実的な古代ローマ人の姿が彷彿として興味深いのである。

「メメント・モリ」と「死の舞踏」

折しも私がこの稿をしたためているとき、傍らから妻の言うことには、たまたま先日見たばかりという或るTVに宝石についての番組があり、その中になんと「メメント・モリ」と名付けられた、数は少ないが今もって珍重されているというヨーロッパ中世の宝石指輪が映し出されていたという。なんでもその筋の専門家によると、それは結婚指輪を指すものらしく、そこには大変精巧な一對の細工が施されていて、その一方に人間の骸骨の姿、そしてもう一方には「memento mori」（綴りは確かではないが）という文字が彫り込まれているのが特徴だそうである。「驚き・桃の木・山椒の木」とは私にとってこのことだった。

「メメント・モリ」と骸骨の取り合わせこそ、まさにこの言葉の意味するところの「死を想え」そのものではないか。それにしてもわれわれ日本人なら、結婚指輪にそうまでしなくてもよさそうなものと思うのが人情だろう。それにまた古代ギリシャ・ローマであっても、結婚を「死」と骸骨でイメージするなどという暗い発想をもってするには、地中海世界は明るすぎた。

しかしギリシャ・ローマ時代後のヨーロッパのキリスト教世界にあっては、「メメント・モリ」“死を想は同じ言葉であっても意味するところに変質が生じていたのではないか。

私がとりわけ“暗黒”のヨーロッパ後期中世が発する「メメント・モリ」に異形を感じとったのは、オランダの史家ホイジンガーの名著「中世の秋」を読んでからのことであった。

ある時代を明るいか暗いかの議論は、各々の主観によるものだろうからおおむね不毛なものかと思うが、早い話中世ヨーロッパ世界が暗黒の時代だったかどうか、と問われれば史家の論議も沸騰するにちがいない。余談ながら「ヨーロッパ」という語源をたどれば、セム語系のギリシャ語「エレボス」(闇)ということらしい。ギリシャ神話にいう主神ゼウスが女神「エウロペ」を掠奪したという話にも含意があると、ヨーロッパ中世史家の堀越孝一氏はいう。

古代ギリシャ・ローマの時代なら、彼らの目に映った当時のヨーロッパ地域は、ただにそこは蛮族が森に生息するだけの暗黒の世界だったにちがいない。これは興味ある歴史認識である。しかしながらその蛮族とみなされていたゲルマン民族の諸族が、怒涛のようにローマ帝国の版図に侵入して以来のヨーロッパ中世を、暗黒か否かと問われればやはり意見は分かれよう。

なぜ時代の明暗を云々するかというに、私はいま中世ヨーロッパ世界の「メメント・モリ」を考えている。

私の目に映るヨーロッパの中世はといえば、ホイジンガーの「中世の秋」に従ってこれを14、15世紀の後期中世に限ってみれば、この時代はまがましい貧困と疫病(ペスト)と戦乱(英仏百年戦争)に象徴される、民衆の受難世界であった。

もしも、世界の歴史に仮にもその時代の人口一人あたりの受難度とか悲惨度といった係数が捕捉されていたとすればの話だが、有史以来今日までこの時代ほど高い数値を示した時代はなかったのではないかと私は想像している。

この時代、宮廷と教会と騎士道に象徴される華美と虚飾とはうらはらの、ヨーロッパ後期中世を私が暗黒の世界とみたてた理由がそこにある。

「メメント・モリ」にまつわる受難や悲惨を考えると、私は聖アウグステスを想わずにいられない。彼は先述のホノリウス帝とほぼ同時代の人だったから、ローマ帝国の滅亡を目の当たりにした聖職者の一人であり、中世キリスト教思想の先駆者として、また「神の国」や「告白」の著者として、我が国でもけっこう知られている存在かと思う。

ここに聖アウグスティヌスを持ち出したのは、ほかでもない、私が先に述べた「メメント・モリ」が意味するところの変質が、彼の生きることになるローマ帝国の末期、早くも彼をはじめとする聖職者たちによって、必然のうちに進められつつあったのではなかろうか、これがわが歴史探偵の推察である。

つまりは古代ギリシャ・ローマの「メメント・モリ」、それは哲学か美学だったかはともかく、やがて想念となり呪文となり、箴言となって政治や社会に語りつがれてきたものだった。それがどうだ、いまやキリスト教化とともに中世へと突きすすむ現実世界は、暗黒と絶望でしかない民衆にとっては、ただ神にすがり神に祈るほか道はなかったのだ。ここに「memento mori」は民衆の叫びとなり「祈り」と化したのである。

それが証拠には、聖アウグスティヌスが「神の国」を著したのは、かの歴史に有名な西ゴート族による凄惨な「ローマの劫掠」の目撃だったといわれている。いまから数えればちょうど1600年ほど昔(西暦410)のことだった。言葉につくせぬローマの町の惨劇に大きな衝撃をうけた彼は、絶望にうちひしがれた信徒を救うがために「神の国」を書いたという。神に救いを求めるほかに道のあるはずはなかったのだ。彼はひたすら地上の悲惨な姿も所詮は「神の国」への道程だと説いていたという。

このときアウグスティヌスが民衆に「メメント・モリ」と説いたか私は知らない。しかし彼は少なくとも「神の国を想え」とは説ききたったはずである。ここでは「死」はすでに「神」も同然だったのだから。

「中世の秋」と「死の舞踏」

ホイジンガーの名著「中世の秋」(堀越孝一氏訳)にもどる。彼はこの著作のなかでヨーロッパ後期中世、とりわけ14～15世紀のヨーロッパの思想と社会について、息もつかせぬほどの克明な分析と評論を展開する。ローマ帝国の崩壊からかぞえれば、およそ千年ほど後きんしの中世世界のことである。

著者はこの中で「死のイメージ」と題する一章の冒頭をこんな風に切り出している。「15世紀という時代におけるほど、人々の心に死の思想が重くのしかぶさり、強烈な印象を与えつづけた時代はなかった。「メメント・モリ」の叫びが、生のあらゆる局面に、とぎれることなくひびきわたって

いた。……そしてついには、あたりを圧する大合唱までふくれあがって、おもおもしろいフーガのうねりのうちに、とどろきわたるようになったのである。」と。

「メメント・モリ」が叫びであれ祈りであれ、それによって史家のホイジンガーがイメージしたヨーロッパ後期中世（14～15世紀）は、具体的には「死の舞踏」であった。主としてそれは擬人化された人間の骸骨が踊る姿である。

西暦1347年から1350年ごろにかけて猖獗をきわめたとされているペスト（黒死病）は、この世紀末までに、死者は当時のヨーロッパの全人口の三分の一とも三分の二ともいわれて、その数二千万から三千万にのぼったという。その惨禍を思うべしだが、さらにはこれに輪をかけるように相前後して起こった英仏戦争は、文字どおりなんと百年もの間くりかえされ続けたのである。この間の戦禍もさることながら、間欠的におとずれた休戦のさなか、兵士たちによる掠奪や暴虐の悲惨もまた尋常でなかったと、ホイジンガーは附記している。

その彼によれば、実際こうした黒死病の大流行や戦乱の最中には、死者を弔うにしても埋葬や葬儀がおいつかず、人々はただ死の恐怖におののき、やり場のない怒りと悲しみにとりつかれた民衆は、墓地や教会や街の広場においてただ半狂乱となって倒れるまで踊りまくるという、集団ヒステリー的な現象が続出したという。

こうした民衆の姿がある時を経た後、芸術家たちによって擬人化され、骸骨の姿をとって木版画の上に踊り狂うさまが続々と写し取られて以来、ヨーロッパ中世の歴史はさぞかし騒然としたことであろう。これが世にいう「死の舞踏」（ラ・ダンス・マカーブラー）であった。

ホイジンガーは同じ著作のなかで慨嘆している。「恐ろしいまでに骸骨の踊る完璧なイメージ、「死の舞踏」のなかに、人間の生きた心の動きが石と化している。」と。

結び、そして「方丈記」

私は「中世の秋」を読みふけりながら、そぞろ我が国中世の類似を思っていた。それはあの鴨長明の著す「方丈記」のなかに出てくる仁和寺の僧、隆暁法印なる男の物語であった。著者の長明が京の町で見聞したと思われる養和年間（1181～1182）の飢饉についてである。ヨーロッパ後期中世

を襲ったペストの時代にくらべれば、150年ほどさかのぼることになるだろうか。

この僧侶はうち続く旱魃や大風や洪水などによって、作物が不作をきたし無数の餓死者をだしたうえ、これにとどめをさすかのように疫病の発生が人の命を奪っている惨状に心をいためて、京の町（左京）にでかけたのだ。そしてこの僧侶がやったことはといえば、そこで出くわすことになる餓死者の一人一人の額に、梵語（サンスクリット）の文字である「阿」の字を書きつけてやることで、死者の成仏（結縁）をかなえてやることだったという。この僧が数えたところでは死者の数、左京だけで42,300人余にのぼったと「方丈記」は記す。

養和年間の飢饉の前後には、「安元の火災」、「治承の竜巻」、「元暦の地震」といった天変地異が、立て続けに都をおそったのであり、長明はともかくとして民衆が、ホイジンガーの記す「厭うべき死の地上的局面」に狼狽し絶望するさまには、まさにヨーロッパ後期中世の「死の舞踏」を想わせるものがある。

そのとき我が国の中世にあっては、ほとけを宗とする僧侶たちの多くは、法然や親鸞をはじめとして、もっぱら念仏を唱えて成仏することを説ききったが、ヨーロッパ中世にあって聖職者たちは、ひたすら「メメント・モリ」を唱導して「神の国」への祈りをささげていたのであるだろうか。

その時、ホイジンガーがいみじくも指摘のとおり、墓場や教会や広場で「ついにはあたりを圧する大合唱にまでふくれあがって、おもおもしろいフーガのうねりのうちに、とどろきわたるようになった」のは、説教師と民衆が唱える祈りの言葉「メメント・モリ」であったのだ。

（おわり）

第 二 の 人 生 (Ⅱ)

園 山 春 一

このタイトルで投稿するのは2回目となります。第一回目で小学生時代に担任の先生から読んでもらった「ビルマの豎琴」に感動し自分もいつか学生に感動を与えられる先生になりたいと言う夢を持ったことを書きました。その夢を実現できる機会をニチメン卒業時に北陸大学から与えてもらい教壇に立つ夢が実現しました。第一回目の稿で学生にどんな感動を与えることができたのか最終稿で書きたいと述べました。そのこともあって感動について書くつもりでパソコンの前に座り、学生に与えた感動の具体例を探し求めました。そして、気が付いたことは、わたくしが感動をもらったのであって、与えた感動に関しては全く自信がないことがわかりました。そもそも先生は学生に感動を与えるのではなく、結局は、学生から感動をもらって、それを生きがいに教員生活を充実させているのではと改めて認識しました。従い、本稿では与えた感動でなくもらった感動を書くという当初考えた趣旨と異なることになったことをあらかじめお断りし、お詫びいたします。

この3月をもって教員生活15年を迎えることと70歳をいくばくか超えたことを機に教員生活に別れを告げる決心をしました。70歳を過ぎてから20代そこそこの学生と向き合うのは相当の体力と精神力が必要です。そのようなことを意識したこともあり、そろそろ引き時であると考え、このまま続けることは「老骨に鞭打つ」を通り越して「老骨をさらす」ことになると思いこの決断となりました。それに、この2月心臓の冠動脈、血栓、弁の3か所の手術を8時間にわたり受けましたが、このこともあって講義を行う自信が体力的にも、精神的にも、少し失われたこともあっての決断でした。

その決断が3月初めに卒業生や現役の学生に知れると、12年前のゼミ生から今年のゼミ生までそしてゼミ生ではないが講義を通じ親しくなった卒業生が合同で「お別れの会」を催してくれました(60名強の出席者がありました)。さらには、卒業年度別お別れ会も催してくれ、長年顧問を務めた

テニス部も同様の会を催してくれました(これまた60名強の出席者)。その他には中国人卒業生で現在上海、北京で働いている10数名の教え子から上海に招待されたり、中国の《景德鎮》の壺や数々の贈り物が届いたり、一人の元学生は上海から会いに来てくれたり、2月の入院時には、同室の方々にご迷惑をおかけするほど元学生、現学生の見舞いが殺到したり、結婚式に毎年5・6組から主賓として招かれたりしました。こうしたことは教員冥利であり、わたくしが喜びや感動を感じる瞬間です。

感動は、あることを成し遂げた達成感や満足感から生まれ人ひとり一人の、職業、人生感、立場などによって達成感も満足感も感動も異なると思います。大学の教授は、以前にも申し上げた通り、研究者であるか、教育者であるか、二者択一で両方を兼ねる教員はごくまれな存在です。当然、わたくしの場合は教育者でありました。研究者であれば研究成果を誇れるし、それによって自らの達成感、満足感が得られるわけですが、講義はごく狭い専門分野に集中し日本の大学がリベラルアーツの教育が疎かにされ、日本人の教養教育面で劣ってしまう欠陥が生じる原因となっています。教育者はそうした教育上の、日本の大学の欠陥を埋めるべく努力をしていますが、具体的な成果が示せず、何をもって目的を達成したのか、何をもって頑張ったとして満足できるのか掴めず、教育者の苦しみはこんなところにあると感じており、大学というところは以前から研究者が尊重されるところであり、教育者が尊重されないところではありますが、日本の大学教育の欠陥になっているのも事実と14年間の教育者としての体験より強く感じます(読者の皆様も海外駐在や出張であるいは日本国内を外国の取引先と旅行した際自分の日本文化の理解度の不足を感じられた方はたくさんおられるのではないかと思います)。

教育の成果として、例えば、外国学部の英語専攻学生の卒業要件にTOEIC500点ないしは英検2級の取得を課したことがあります。勿論、英語の

教員が教育の責任者であります、ちょうどそのころ学部長を務めており全学生を卒業させる別な責任が学部長にありました。毎年200名前後の卒業予定者の内30名程度が1月の段階でこの卒業要件未達成となります。この30名の学生の3月に入るまでの英語追い込み授業は学生にとり筆舌に尽くしがたい約一か月の英語合宿となります。こうした集中教育のすさまじさを経て何とか最後の3・4名の留年候補生を残し卒業資格を得られます。しかし、残った3・4名の学生をあらゆる観点から見直し、分析し長所を見出し何とか卒業してもらうための喧々譁々の議論を教授会で行ったうえ、親御さんに面談し十分な英語教育がなしえませんでした。総合的に見て卒業してもらいますと、学部長としてお詫びすることが毎年の儀式としてありました。そんな苦労をさせられた学生が社会人となりアメリカ駐在を命じられ、5年後に帰国し大学に来てくれたら学生時代もっと英語をやっておくべきだったと反省するのは当然として、同時に、卒業前の2月いっぱい先生方に紋られたおかげで大概のことには耐えられる忍耐力ができたまた、英語に駐在当初より容易に取り組め、駐在生活において公私両面で救いとなりましたと言ってきたときは教育者としての達成感が生まれました。

また、5年ほど前に起こった能登の地震の際、ゼミの学生たちはアフリカへの援助問題を学んでいたこともあり、ボランティア活動を考え輪島市に行く用意をしたが連絡した輪島市庁、輪島商工会議所より体よく断られました（ボランティアに来てくれた人の食事、宿泊などの世話を地元の人が見ることが大変だから来ないでほしいと言われた）。学生たちは断られたこと自体にショックを感じたようで、なぜ断られたか、どうすれば協力できるかを検討すべきところ、地元が断るのは人の善意を無にすることであり失礼と非難の声ばかりだった。そこで、輪島市に住む友人にどんな協力が学生にできると思うかと問い合わせたところ、旅行者、観光客が激減し名産品、土地の人々の作る土産ものが売れないで困っているというので、それらを大学でまず学生と教職員に売り、続いて学園祭で、金沢市各地区の自治会と協力し秋祭りでの販売を行い、その売上金を輪島市に戻すことを計画実施し、約20万円の売り上げをあげました。その20万円をもって輪島市庁を訪れ売上金を寄付

し、そのお札に町で名産品や土産地を作っている人々とバーベキュー大会を開きボランティア活動を実施した成果を実感しました。このことは地方新聞ながら新聞にも取り上げられました。なおその翌日は、仮設住宅を訪問しそこに住むのが多くはお年寄りであり話し相手が欲しい方々なので学生が話し相手となり、薬学部の学生も一部参加していたので薬の相談などにもものって数時間を過ごしましたが、今どきの若いものはとよく嘆きの言葉と聞きますがこの数時間に限ればそんなことなく、それは立派なボランティア活動、救援活動でした。このゼミの学生の卒業論文は自らの経験、体験を入れた援助活動についての論文となり「机上の空論」となりがちな卒論が生きたものとなり、ゼミ指導教官として満足度の高い一年であったと思っています。

このような達成感、満足感、感動は14年間で多々あります。そのこともあり最後となりましたが、この14年間は大変意味深い、また、豊かな体験を得た14年であり、それこそが達成感や満足感に満ちたものであったといえます。

2回にわたりご愛読いただきありがとうございました。また何かの機会がありましたらお目にかかりたいと思います。

城下町・岸和田あれこれ

浜 口 信 恭

大阪と和歌山の間位置する城下町・岸和田市は最近とみに全国的に知られるようになりました。ダンジリ祭りのみならず、最近のNHK連続テレビ小説放映の影響もあって、観光客でずいぶんにぎわっているようです。

ついては小生、青春時代の3年間を岸和田高校ですごしたご縁もありこの町のあれこれにつき、思いつくまま記してみたいと思います。

1) 町の由来と岸和田城



町のシンボルでもある岸和田城を、楠木正成の一族である和田高家が築いたことがはじまりで、岸（大阪湾の海辺）近くに和田氏が築いた町ということが、岸和田の由来といわれています。

江戸時代、寛永17年（1640年）岡部宣勝が入城以後明治維新まで岡部氏13代が5万石の大名として、ここで町を続けて統治しました。

城の天守閣は江戸末期の落雷で消失しましたが、昭和29年に再建されました。

昭和30年春に岸和田高校に入学した小生は、出来上がったばかりの天守閣を目のまえにして、周囲の桜が満開の入学式を今でも鮮明に覚えています。

当時は、城の中に図書館があり、ことあるごとによく通ったものです。天守閣内部には歴代城主の武具が展示されています。また天守閣から下を眺めると中国の三国志に出てくる諸葛孔明が、合

戦の際に布陣した無敵の陣形である「八陣の庭」を見渡すことができ、絶好の展望場所となっています。

2) ダンジリ祭り

岸和田といえば、ダンジリ祭りということになりますが、そろいのはっぴを身につけたひき手が高さ4メートルのダンジリを猛スピードで街角を引き回すさまは迫力満点です。一目見ようと集まる観光客は50万とも60万人とも言われています。最近はテレビでも全国に放映されています。

今から300年前、岸和田藩主・岡部長泰が京都伏見稲荷を城内の三の丸に分祀すると共に五穀豊穡を祈念して祭りを催し、城下の庶民にも参加を許したのがダンジリ祭りの始まりといわれています。観光客の多く集まる9月祭礼と、町の求心力を高める10月祭礼の2回の祭りが行われます。全部でダンジリが82台あり9つの地区がまとまって祭りを行いますが、岸和田地区と春木地区の35台が9月に、その他7地区の47台が10月祭礼を行います。ダンジリは総けやきづくりで、細部に細やかな装飾を施された走る芸術品ともいえるものです。前方に100メートルの二本の綱をつけひき手たちが町を疾走します。

見所は方向転換の「やりまわし」で、スピードをそのままに曲がり角を曲がる瞬間です。住民は一年をとうして、社会奉仕活動を行うなど、街づくりに注力し、祭りを大切にしています。祭り以外の日に祭りを体感したい人のためにはダンジリ会館があります。そこではダンジリの歴史や変遷のほか、実物のダンジリでいろんな武士や動物の彫り物が埋め尽くされているさまを体感できます。

ダンジリ会館のそばにはダンジリが宮入する650年の歴史ある岸城神社があり、各町の



ダンジリが参詣する様は圧巻です。

是非いちど機会をつくり、実物をごらんになることをお勧めします。

3) コシノ物語

コシノ三姉妹に関わる物語は、三姉妹を育てた母親（コシノアヤコ）がまだ存命中であった2005年1月に「コシノ物語」として、東京の明治座で舞台公演がありました。そのときの主な俳優は満田久子、畑慎之介、牧瀬美穂、赤城春江などでした。

三姉妹の上二人、ヒロコとジュンコが岸和田高校の卒業生で、特にジュンコは小生と同学年であったことから、東京在住同学年の同窓生十数名が応援に出向き、舞台終了後の打ち上げパーティーでは、コシノ家族を含め出演俳優も一緒に、にぎやかに騒いだものです。

昨年から今年にかけて放送されたNHKの連続テレビ小説「カーネーション」では、三姉妹の母親小篠綾子をモデルにして、ミシンひとつで人生を切り開いていくヒロインの奮闘と三姉妹の世界的活躍が放映されました。俳優は尾野真千子、麻生祐未、小原善作、宝田彰、十朱幸代、夏木マリその他の面々です。小生には関西弁の中でも特徴のある岸和田弁が毎朝懐かしくもおかしくも、聞こえてきました。

4) 岸和田高等学校

学校は岸和田城を目の前に仰ぎ、ダンジリが宮入りする岸城神社の隣に位置する優れた環境の中にあります。地域の人々の熱い思いに支えられて、115年の伝統を誇っています。前身である旧制岸和田中学校の講堂に「啐啄同時」という額が掲げられていたと聞いています。この意味するところは、「啐」とは鶏の卵がかえるとき殻の中で雛がつつく音、「啄」とは母鶏が殻を噛み破ることで、親子の思いが一致すること、即ち禅宗で言う師家と弟子の働きが合致することを表しています。（広辞苑より）

かような考え方を理解して勉学に励めという教えにほかなりません。現在は卒業生で仁和寺門跡の南場道さんに揮毫して頂いた「啐啄同時」の新しい額が多目的ホール入り口正面に掲げられています。卒業生はさまざまな分野で活躍中ですが、ニチメンにも多くの卒業生が勤務していました。

ニチメン東京社友会の島崎副会長、大阪社友会

の田淵会長はじめ業務本部におられた日高さん、貴志さん、木材の五十川さんの奥様など男女共にたくさんおられたと思います。

昨年からは、大阪府立の北野、大手前、高津、天王寺、生野、豊中、茨木、四条畷、三国丘、岸和田の10高校が、進学指導特色校に指定され、新しい教育方針が打ち出されています。激しく移りゆく時代の新しい息吹を導入しつつ更なる伝統を積み重ねてほしいものだと思っています。

5) 五風荘

岸和田城のお堀端にある五風荘は、広大な回遊式庭園で、岸和田市の指定文化財になっています。元は城主岡部公の茶室跡に地元の財閥であった寺田氏が立てた邸宅です。（ニチメン・大阪の繊維本部に財閥子孫の寺田さんがおられ、同じ室内で一緒に仕事をしていたことがあります。）

昭和初期に建てられた母屋は今もそのままの風情を残しています。誰もが自由に散策できる庭園には、織田信長ゆかりの十三石の供養塔や奈良東大寺ゆかりの表門など歴史的な建造物が点在し、多くの人々に愛されて今日に至っています。

6) ご当地グルメ

まず城下町の和菓子としては「むらさめ」を筆頭に、「ダンジリ饅頭」、「クルミ餅」などがあります。次にご当地グルメとしては、たまごのから焼き「たまから」や、鶏の洋食焼き「かしみん」などがありますが、なんと言っても忘れてはならないのは水茄子の漬物です。水茄子は泉州をルーツとする茄子の一品種で、皮肉質が大変柔らかく、みずみずしいので、その浅漬は絶品というほかありません。

地酒としては井坂酒造の「三輪福」、「ダンジリ祭り」、「六甲おろし」、寺田酒造「元朝」「泉州桜」、「こころもち」などがあります

また岸和田漁港と春木漁港とを合わせると漁獲量は大阪湾で第一位の水揚げです。

ここで取れるタコ、ハモ、イカナゴなど新鮮な旬の魚も併せて楽しむことができます。

岸和田に足を運ばれた際には、賞味されては如何でしょうか？

7) 終わりに

昭和の香り漂う町、海山の魅力てんこもり・・・ぜひ、岸和田へ来ちゃってやー！

音楽そぞろ歩き(その2)

高 木 恒 久



仙台国際コンクールでの審査員達と。
右より順に エリソ・ビルサラゼ、
野島稔審査委員長、セシル・ウセー、筆者

スターリンに反抗したユージナ、亡命した美女ダビドビッチ。

偉大な女性ピアニスト、マリア・ユージナは信心深いキリスト教徒でした。1940年のある晩、彼女が弾くモーツアルトの協奏曲23番をラジオで聴いたスターリンが甚く感動したとあります。スターリンは側近に「あのレコードを一枚」と命令を下し、側近は畏まりましたと承り、放送局に調達を指示したのです。処が、それは生放送で、しかも録音を取っていなかったもので、パニックになりました。スターリンの命令に対し、異を唱える人は居ないので、再録する以外道はありません。

その日の深夜、オーケストラの団員はスタジオに再度召集され、指揮者も、ユージナも呼び出され急遽同じ曲を録音することになりました。スターリンの命令と知った指揮者は緊張のあまり倒れたので、別の指揮者を叩きおこし、何とか夜中に録音を済ませて、早朝プレスされたレコードは直ぐにクレムリンに届けられました。

スターリンはユージナのピアノ演奏に特に感銘を受けたので、褒美として2万ルーブルを彼女に届けさせます。これに対しユージナが書いた礼状は、「スターリン閣下。過分な思召しに感謝申し上げます。ご好意を役立てたく、近くの教会に全額寄付して傷んだ礼拝堂の修理にあてて貰うことに致します。閣下に神のご加護がありますよう祈りつつ、マリア」と記し、クレムリンに届けさせたのです。

宗教を禁止していたスターリンは、その礼状を読んだ上で無視したのか、読んでいないのかいずれにせよ返事は無く、この話は終わります。しかし、以降ユージナは不遇で、この不遇はスターリ

ンの死後も続きました。

私がユージナの姿を偶然見たのは年老いた彼女の最も哀れな場面でした。それはスターリンの死後15年たった1968年、カラヤンがベルリン・フィルハーモニーを率いてモスクワに来た時です。この時チケットは一般売りされず、政府の高官、誉れ高き芸術家達で音楽院大ホールは満席でした。私は裏から1枚の招待券を手に入れることが出来たのですが、これはかなりの幸運でした。

会場に着くと、入口には馬に跨った7人から成る警備隊が睨みを利かせ、紛れ込もうとする一般人を押し返していました。その時、押し返されまいとする一人の老婆の姿を私は見ました。顔を見て「ユージナ」だと直ぐ分かりました。私は彼女の顔をレコードのジャケットで見て知っていたのです。警官隊に追返されている哀れな老女が世界的なピアニストだなんて。ユージナはそれから2年後(1970)にこの世を去りました。(ユージナが自由に神の世界と地上とを往き来しているかの様な崇高な演奏録音があるので紹介します。ベートーヴェンの最後のピアノソナタ作品111番。1954年10月20日ライヴ録音、アルティストリピオア盤。)

さて、館内を見渡すとキリレンコ副議長(ブレジネフに次ぐ当時ソ連のNo. 2)が貴賓席に座る処でした。国を挙げて、カラヤン指揮するベルリンフィルを迎えているのです。平土間にはショスタコビッチ、リヒテル、オイストラフ達の顔も見えます。前半の曲目はベートーヴェンの交響曲第5番でした。アントラクト(中休み)でロビーに出てみると、美しい女流ピアニスト、ベラ・ダビドビッチが数人の仲間と立話してます。舞台上でピアノを弾いている時の緊張した面持ちと違い、こうして自由に談笑しているとき彼女の表情は、なんと気高く、美しいことか。1949年、ショパン・コンクールで優勝してソ連の国旗を高々と揚げた彼女でしたが、1978年にソ連から



若き日のベラ・ダビドビッチ

抜け出しアメリカに亡命します。ユダヤ系の彼女はソ連にいても何かと報われず、亡命の道を選んだのです。彼女の父親はアゼルバイジャンの首都バクーの歌劇場の支配人、母親は歌手でした。

アメリカに亡命してからはダビドビッチの演奏を聴くチャンスも無くなった私は、

半ば彼女の存在を忘れて居ました。当時から34年が過ぎ、私は60歳でニチメンを退職、第二の職を得てロンドンに出張することがありました。そして仕事も終え、明日は日本に帰るという晩が唯一の自由な時でした。さて、今晚良いコンサートがあれば良し、なければ、チェッコーニ（昔よく利用したレストラン）でゆっくりブルゴーニュに羊の胸肉のローストを楽しもうと心に決めて新聞広告をパラパラと捲ると、「ベラ・ダビドビッチ」という文字が目に入りました。なんと今晚だ！ついてるぞ！チケットさえ買えばだ！私はタクシーをウイグモア・ホールに走らせました。ボックス・オフィスの窓を叩くと、「本日の切符は完売」と素気無い返事。どうしても聴きたいと食い下がると、男は開場の30分前にダメ元でこの窓を叩きなさい。運が良ければキャンセルが出るかも知れませんか。言われる通りにすると1枚キャンセルが出ていてそれを買いました。

燃える心で舞台の上に据えてあるシュタインウェー（ピアノ）を睨みつつ、私の心は、美しいベラを待ちます。ちょっとした緊張の時間が流れました。舞台左手からベラの登場です。あっと私は驚きました。お婆さんが登場したのです。

34年ぶりとはいえ可成りのお年寄りだ。ソ連での不本意な生活、出国までの不安、初めての地アメリカでの再出発、想像を絶する苦労の連続だったことを想像しました。

その時彼女は未だ70歳そこそこでしたが、90歳位に見えました。プログラムの最後にシューマンのクライスレリアーナという曲を弾いたとき、若い時と違いテンポも遅く、それがまた味わいを深めていたのかも知れませんが、私は聴くのが辛かったです。草臥れたのでしょうか、客席からのブース（アンコール）の掛け声と拍手が繰り返され、彼女は何回も舞台上に現れましたがそれ以上の演奏はせず、演奏会の幕が下りました。

私はホールから飛び出すと控室につながる階段を2段跳びで駆け上がり、ベラに会いました。先方はまだ私を知りません。誰だろうと訝っているので、「私はあなたを34年前から知っていますが、貴女はまだ私を知りません」と叫びながら歩み寄り、話を続けました。

私は「最初に聴いた貴女の演奏はサンサーンスの2番。あれは私にとって忘れられないコンサートでした。次にラフマニノフの珍しい第4番の協奏曲。ボロジン四重奏団とのシューベルトの「鱒」、音楽院大ホールでの全曲ショパンのプログラム。みんな私は聴いてますよ。」といったのです。

つまり私は貴女の「追っかけ」だったんですと言わんばかりの私に対し、年老いたピアニストは嬉しそうに微笑んでいました。ベラが亡命した後のロシアの様々なこと、コンセルバトワールの変わりよう、彼女の友人で私も偶々よく知っている文化省のお役人のこと等々を話すうちに時間が過ぎ、ベラはハット気づいて、「まあ、皆さんが待っているらっしゃる」というので、私も振向くと長い人の列がサロンの入口から階段の下に向けて続いています。

私は、しばし横にどいて彼女がサインに応じている姿を見ていましたが、とても時間がかかりそうなので、「ベラ！また近いうちに会えるでしょうね」と云うと彼女も「もっといろいろ聞かせてほしいことがあるわ」と言い私たちは別れました。

それから数年して彼女の息子ドミトリーが来日した時、「ママに会ったんだよ」と告げると「ママから聞きました」といっていた。息子さんは長いことロンドン・交響楽団の芸術監督で活躍していたドミトリー・シトコベツキー氏で、私は息子さんとは以前から知り合いだったのです。

さて、グルジア生まれでミュンヘン在住の大ピアニスト、エリソ・ヴィルサラゼ。ショパンを弾くために生まれて来たディーナ・ヨッフエ。麗しの女神セシル・ウセー（フランス）など偉大なピアニストたちとの親交に恵まれている私の老後は幸せでミューズの神に日々感謝しています。今回挙げた5人はいずれも女性ピアニストです。



バイエルン放送交響楽団員と
指揮者マリッス・ヤンソン（右端） 各氏のサイン入り

(続) イギリス徒然 パブ — 英国だけのもの

柴 田 隆



1) パブは英国特有の家庭に代わるもの。

“パブは英国特有のものである。”とイギリス人は自慢する。

“パブは家庭よりの逃避場所であり、又家庭の代わりでもある。”こんな所は英国にしかない、従ってパブは英国特有のものである、と言うのである。

事務所の近くのパブで、同僚と一杯やったり、昼食にパブランチを食べたりしていると、パブはただの飲み屋であり、手軽な昼飯屋である。そのパブがイギリス人がそんなに自慢するようなものなのか、と疑問に思い、興味を持った。

土曜日に骨董市があるポートベローの“ポートベロー・シップ”というパブの主のようなジミー爺さんに“貴殿はパブに何を求めるか？”と質問した。「“カンパニー”(仲間)、“アトモスフェア”(雰囲気)、“ドリンクス”(飲物)」と、間髪をいれずに返事が返ってきた。

ロンドンのセレブが集まるチェルシーにあるパブ“クイーンズ・エルム”の定連のマイクに聞くと、これも即座に、“インテリジェンス”(知的で、有益な会話)と答えた。

要するに、知的な雰囲気、気の置けない仲間と話をしにパブへ来る、ということである。

そして気の置けない仲間は家族と同じであり、家庭にいるようなくつろぎが得られる、というのがパブの本質であり、このようなパブは英国にしかない、と自慢しているのである。

日本に帰国して、一人でぶらっと立ち寄って、来ているお客と談笑できる 飲み屋”を探してみた。

狭い探索の範囲では、主人(保育社カラーブックス“洋酒入門”の著者。)が元気だった頃の、難波の“Yバー”位しか見付けられなかった。矢張りパブは英国特有のものであった。

イギリス人は個人主義的で、お互いに干渉しないと言われるが、イギリス人といえども孤独に生きられるものではない。この個人主義社会の寂しさの息抜きの役割を、第二の家庭としてのパブが果たしているのだろう。因みに、ジミー爺さんもマイクも離婚していた。

パブをネタにしたジョーク：

イギリス人の宇宙飛行士が二人、月に着地した。当然のことだが、一人が外に出てパブを探しに行った。少しして帰ってきた。“パブはあったが駄目だった、アトモスフェア(大気と雰囲気)の二つの意味)がなかった。”

2) パブは定連になって楽しむ。

“感動のサービス”で有名な大阪キタのRホテルは人気が高い。しかし食事に行く程度の“いちげんさん”ではその良さは中々実感できない。矢張り定連にならないと、駄目なようだ。パブも同様に定連にならないと、その醍醐味は味わえない。

土曜日の昼前、ポートベローの行きつけのパブに入る。カウンターに行きビールを注文しようとする、生ビールが出された。注文していないのに“??”と見回すと、カウンターのあちらでハンガリー人のニックがウインクしている。彼の“おごり”である。

そのビールを持って、取敢えずジミー爺さんのグループの話を輪に割り込む。

そして皆に(4~5人位)一杯ずつおごっておく。そうすると、その内に一杯、又一杯と、断らない限り皆から返ってくる。“イギリス人が二人パブへ入ると2杯飲む。おごり合うからである。”と言われる所以である。

どうしたら定連になれるのか?“見知らぬ人たちが沢山ここへ来るが、見知らぬ人で終わる人が多い。知的な(インテリジェント)な話ができな

いからだ。”とクイーンズ・エルムのマイクは言う。それより、“パブへ良く来るのが必要条件だが、皆に受け入れられないと、定連にはなれない。”とどこかのパブで聞いたが、これが一番核心を突いていると思う。要するに皆さんと肌が合うかどうか、ということである。

私の場合、ポートベロー・シップとクイーンズ・エルムの2軒のパブで、そこの“主”のようなジミー爺さん、マイクとうまが合い、気が付いたら定連の仲間入りをしていた。

いつもこの2軒のパブに行くと、数時間を過ごすことになる。飲物はビール。おごり、おごられで随分飲むことになる。下ネタと政治向きの話はしたことがない。後で今日は何を喋ったのかを思い出そうとしても、余り思い出せないことが多い。ということは、愚にもつかぬことを話しているということである。

日本人は相手が“何処の、何様”かが分からないと、落ち着かないものである。このパブの定連達は、“何処の、何様”には無関心である。長く付き合っていると、何となく分かってくるが、それは本人が喋ってくれた場合に限定される。積極的に相手の身元調べをしようとはしない。私も職業を聞かれたことは一度もない。パブの定連達の付き合いは“淡きこと水の如き”付き合いである。

一人でぶらっと行って、数時間くつろいで過ごせる場所があると、随分助かる。

ロンドンでは単身赴任だったので、単身赴任のやるせない孤独を随分癒して貰った。“パブは第二の家庭”であると言われるのも、何となく理解できた。

3) 紳士はパブに来ない。

イギリスは紳士の国と聞いていた。トラッドな身なりで、礼儀正しく、相手への思いやりがあり、公正、公平に振舞うのが紳士と了解していた。

パブでこのような紳士らしき人には余り出会わなかったが、時たま出会うと、“貴殿は紳士であるか？”と聞くことにしていた。(今から思うと、失礼なことを聞いたものである。)返事は皆“ノー”だった。ある時、ウインザー城を訪れた。麓のパブでそれらしき人に、この質問をした。

“私は紳士ではない。紳士がパブにくるのは、狩の後くらいだ。”との返事を聞いて、今まで描いて

いた紳士像が間違っているのに気づいた。

少し調べてみて、私の持っていて紳士像は紳士の一面をみていただけで、外国人が“日本の女性は皆ゲイシャガールである”と思うのと同じような幼稚な誤解であった事に気づいた。当たり前の事だが、イギリス人が全て紳士なのではなく、紳士とは上流階級の人たちなのである。元々ジェントルマン(紳士)とは貴族より下のジェントリー(郷紳)と呼ばれる地主階級を言った。今でも紳士は田舎に邸宅を構える地方の名士なのである。

“ジョージイン”、セントジェームスタヴァン という名前のパブがある。インは宿屋、タヴァンは酒と食事を出した。(多くが宿泊も出来た。)

このインやタヴァンは村落共同体の中心として、巡回裁判、職業斡旋、政治活動の場であり、又劇や見世物の場でもあった。この結果これ等のインやタヴァンは“公共の家”(パブリックハウス)と呼ばれた。

時代と共に。今まで“公共の家”としてパブの担ってきた役割を専門にやるところが現われ、(例えば裁判所、劇場、見世物小屋)パブは公共の家ではなくなって行った。

パブが公共の家でなくなると、村の中心的存在だった紳士としてはパブへ行く必要性を認めなくなったのであろう、18世紀に入って紳士達は自分達専用のクラブを作って、クラブへ移っていった、ということで、紳士はパブに来ないのであった。

一昔前、工場の便所は“MEN”と“WOMEN”で、事務所は“GENTLEMEN”と“LADIES”だったそうである。ブルーカラーとホワイトカラーを差別していたのである。今では、皆がGENTLEMENとLADIESを好むようである。



中央立てるは筆者

第 三 の 人 生

＊ アドリア海から故郷の熊野灘へ ＊

山 本 寧 雄



ドゥブロヴニク（空からの景色。）

かつて“古きこと世に稀な”と言われた齢に私もなった。編集部からお招きいただいたので、いくつかの想いを書きとめ、東京社友会の方々への近況報告とさせていただきます。

私たちの人生は、幼少青年期、職業生活期、引退後の生活、という三部に分けてみるができる。大戦直前の上海で始まる私の旅路は、北京、京城、大邱、福島、刈谷を経て、南紀新宮、大阪までがパート1。戦時下の混乱の中、親戚を頼って母と移り住み、敗戦直前に新宮に落ち着いて、貧しくも幸せな少年時代を送る。パート2は、1964年に日綿大阪で始まり、東京・モスクワ間を家族と共に何度か往来、その間ワルシャワとニューヨークで半年ほどの単身出張生活があった。ニチメン奉職を通じて、多くの貴重な機会と仕事と先輩・友人・知己に恵まれた。パート3は、1998年から12年間にわたるクロアチア暮らしと2010年秋から今に至る故郷・紀州熊野で、本稿はこの年月の話である。

ソ連邦の崩壊を受け、ニチメンの旧ソ連商内が劣化・縮小してきたのを機に、1998年4月に依願退職し、すぐクロアチアの首都ザグレブに妻と移住した。明るい地中海世界に惹かれたのだ。時は、旧ユーゴ戦争が終わって間もないころであり、危ないと忠告する声も多くあったが、勝手知ったるスラヴ世界なので何とかなんと腹を固めたのである。

滞在ビザを得るため、個人会社をザグレブ市に登録設立した。長年支えてくれた妻に今度は主役になってもらおうと、まずは料理好きな妻を核に日本料理店を開こうと事業環境を調べたが、戦後の疲弊した世相で市民の外食の機会が少なく、時期尚早と判断。さらに、いくつかの小さな売買を手掛けるも、個人商店運営の才覚に乏しい自分に気づいたので、この分野にはできるだけ関わらないことにした。

そこで、愛車オペルを駆って妻とクロアチア内外を周遊し、現状を見て歩くことが多くなった。その印象を書きつけ、考え、多くの人たちと会って話すうちに、新しい話が次々に持ち込まれ、気がつくと実に多様な方向に仕事が広がっていた。次に列挙してみよう。

ネクタイ発祥の地と言われるクロアチアのタイ・メーカーへの助言・協力、クロアチアや隣国のいくつかの大学や市民講座での日本や市場経済に関わる講義、政府観光局・地域観光協会や旅行会社・ホテルなどへの助言と関係資料の和訳・編集、クロアチア出版社の地域案内書の和訳・編集、クロアチアTV番組で日本に関する解説、いくつかのTVコマーシャルへの出演、各地の商業会議所でのカイゼン・マネジメントの講演と個別企業への導入支援、日本の新聞雑誌やTVなどのクロアチア取材・ロケのコーディネート・・・そのうちに学友やニチメンOBや友人・知己がクロアチアを訪ねてくれるようになり、企画・案内するうちに客層



ザグレブ郊外の丘陵にて、今は亡き妻と



アドリア海とドゥブロヴニク旧市街を背景に

が広がって、日本・クロアチアの旅行会社との絆が強まった。

2002年にJICA専門家として懐かしいポーランド各地を訪れて講演し、市場経済への移行について官民へ助言・討議したことも印象深い。これは国際社会貢献センター（ABIC）に推薦していただき実現した機会だ。さらに、ABIC会員として、関西学院大学の欧州研究講座に参加する機会もいただき、中東欧に関する講義を受け持つことになった。1994年から5年間、毎春4時間が私の担当だった。訪日の機会に他のいくつかの大学でも同じようなテーマで講義をし、各地の多くの人との歓談の合間を縫って、自然や神社仏閣などを訪れ、日本の文化と社会について考えを広げ深めることができた。

2007年5月、妻が病没し、それまで以上に仕事に打ち込むようになったが、2009年夏ふと我に戻り、周囲を見回すと、日本の劣化が進んでいるのが大写真になった。特に地方の衰退が目立つようだ。母方の故郷・会津と幼少期を過ごした父方の故郷・南紀熊野の情報を集め、現地との交信を重ね、ついには訪れて現状を見、人々と話し合った。紆余曲折あったが、結局は新宮に移住することに決め、ザグレブと東京をすっかり引き払って、2010年秋に移住してきた。

地方に根を張って暮らし日本の現状を見なおして、その再生に少しでも寄与したいという気持ちが強くなったためだ。東京一極集中は、国の姿をいびつにし、日本の国力を弱めている。特徴を持った美しい地域社会が地方に増えることが、日本再生につながりそうだ。古稀ちかくなつての二重の引っ越しは実には大変だったが、おそらくこれが最後の機会だと思い、一気呵成にやり遂げた。

友人たちや娘夫婦にも手伝ってもらった。半世紀以上を経た故郷帰還である。

新宮は紀州材の集散地としてかつては豪商たちで賑わい、多くの文化人を生んだが、時代が変わって静かな地方都市になり、人口も減っていた。他方、紀伊半島に広がる“紀伊山地の霊場と参詣道”がユネスコ世界文化遺産に登録されており、観光が新たな核になりはじめている。地図を見ていただければ分かるが、紀伊半島は三千六百峰の樹林が畳々と連なって澄んだ大気と清冽な水を生み出し、そこかしこに様々な泉質の温泉が湧いている。太平洋の海岸線は入り組んで変化に富み、太古から世界に向かって開かれており、多くの人や文物を招き入れてきた。北は高野山の真言密教聖地、南には聖なる熊野三山の三大社とそこを結ぶ熊野古道が続き、原始信仰と神仏習合の世界を昔ながらに見せている。

山海の新鮮な食材にも事欠かない。古都、奈良と京都のすぐ南に広がるこの鬱蒼とした神秘の世界は、人々を惹きつけ、多くの上皇・女御・貴族から民衆までが一千年以上前から何度も訪れてきた。いわゆる蟻の熊野詣だ。こういう地理と自然環境のせいで、ここ熊野は大阪・京都あたりに比して夏は涼しく、冬は暖かい。様々な鳥や小動物や虫たちが、ゆったりと生を楽しんでいる。幼児たちは見知らぬ人にも手を振り、子供たちは屋外で声をからして夕方まで走り回る、まるで60年前の自分を見るようだ。

私は、先ず二つのNPOに加わり活動を始めながら、南紀一帯を周遊して古道も歩き回り、地域の実情を学ぶことにした。紀州熊野応援団と外国語ガイドの会“Mi・Kumano”である。



那智大滝と三重塔

応援団は、全国に住む紀州出身者や紀州ファンが会員で、紀伊半島の活性化のため提言・応援しようという組織。会員は関東・京阪神・地元を中心に700人ほどになる。会員有志が、産業・文化・観光などの振興にむけ取り組んでいる。私は新宮支部の事務局員になり、この3月からは会の理事となって主に観光支援を担当するようになっていく。紀州とは、今の行政区で言えば和歌山県全域と三重県の紀伊長島あたりから南になり、ここ南紀一帯は古代の熊野国という独立性の高い地域だった。

外国語ガイドの会は、熊野地方への外国人観光客の増加に対応するため、有能なガイドを養成し、活動している。ここでの私の主な役目は、ガイド諸氏への知識・技能の伝授、それに熊野地方を国内外に紹介することである。世界遺産の威力は大きく、2004年の認定以降は国内外からの観光客が目に見えて増えてきた。ところが、この勢いは2011年3月の東北大震災の影響と9月の紀伊半島大水害による破壊で頓挫し、観光客が激減してしまった。その後、多くのボランティアの助けもいただいて復興が進み、国内外からの来訪者もまた増えつつある。世界観光地の有力評価役ミシュラン・グリーン・ガイドが2011年に、紀伊半島の多くの場所と遺産を最高の三つ星に格上げしてくれたのは、心強い。

新宮に戻ってもクロアチアとの絆は続いている。2011年3月の東北大震災後には、多くのクロアチアの友人たちからメールや電話が来て、気づかせてくれた。向こうから見ると、まるで日本全体が津波に襲われ壊滅状態になったかのように見えたらしく、すぐ戻ってこい、家族や親戚や友人をすぐこちらに送ってこい、いくらでも受け入れるぞ、と言ってくれた。彼らは決して豪華な暮らしをし

ているわけではないが、ザグレブだけでなく郊外やアドリア海の島々にも家を持っている者が多く、実に余裕があるのだ。とにかく来れば何とか暮らせるさ、勤勉できちんとした日本人と呑気なクロアチア人が混ざれば、ちょうど良い社会ができるぞ、と冗談めかして言うが、かなりは本気であろうと私はみている。また去年、こういうこともあった。政府に不満を持つ多くの人たちがザグレブ都心を騒がしくデモ行進して要人たちの“無策と悪事”を大声で糾弾したが、日本大使館前に来ると、列はピタッと止まって静まりかえり、皆が1分間の黙祷を捧げた。この様子はweb動画サイトでも流され、それを見た私は思わず号泣してしまった。翌日の向こうの新聞は、この一件でコメントを載せている“このデモはまともな人たちの訴えだ、なぜなら参加者たちは苦しむ日本人たちに心からの同情を示す礼儀をわきまえていたからだ”。

去年9月には学友夫妻とその仲間たち10人を案内してクロアチアとボスニアを訪れ、彼らの帰国後も私は2週間ほどザグレブに残り旧交を温めた。日本人もクロアチア人も部屋を無償で提供してくれたので、ずいぶん助かった。そういうわけだから、先日クロアチア人が友人の紹介で私を訪ねてきたとき、我が家に数日ホームステイしたのは当たり前のことだ。

地域おこしには三つのモノが要ると言われる。ワカモノ、バカモノ、ヨソモノだ。私は第一要件には少し欠けるが、二つは持ち合わせている。私はいつも思うのだが、もしあの厳しくも充実したニチメン時代がなければ、私のこのような第三の人生はなかったであろうし、この第三の人生がなければ、私の人生はもっとつまらないものになっていたに違いない。

TPPで、英語力不足がやり玉に？

浜 地 道 雄



国を二分するTPP論議において、貿易・関税と並び、「非関税障壁」ということで、日本の英語力不足が「やり玉」に上がる、という言説を知り、驚いた。結果、日本が米国の属国的「フィリピン化」する、という論も見られる。

つまり、ハゲタカ米国が「日本語が非関税障壁だから、英語を公用語化せよ、との要求をしてくる可能性がある」というもの。英語教育に従事する者としても、「ことば＝文化の変更強制外圧」は看過できない。

早速、挙げられている21分野にそれがあるのか点検したが、見当たらず、要は「英語強要説」は、反対論者の「(可能性)想像」であることが判明した。

さらに、反対論にはこの「非関税障壁を撤廃しないなら、ISD = Investor-State Disputeに提訴され、膨大な賠償金を取られる」との言説もあり、これまた驚き、点検した。しかし、ISDは「当該国における不当＝差別＝により、進出外資が蒙った損害(＝金額)」についての提訴である。訴える側はその金額の正当性を法的に、論理的に証明せねばならない。営利企業である以上、その勝算をコスト・パフォーマンス(＝いくらかかり、いくらかけたなら、いくら得られるか)として経営判断をせねばならない。

「日本人が英語ができないことにより、xxxxドル(円)の損害を受けた」とコストをかけて訴える(外資系)企業があるのか？

TPP賛否の大論争は、放射能の(見えない)危険性論議と酷似しており、「可能性」の問題である。その危険性について「専門家」の賛否両論が百出、議論百出。我々市民はどう判断してよいかわからない。

もっとも重要なキーワード「安全で安心な生活、社

会」ということばがメディアで盛んに使われているが、きちっと整理せねばならない。広辞苑によれば安心：心配・不安がなくて、ところが安らぐこと。また、安らかなこと。同じく、安全：安らかで危険のないこと。平穩無事とあり、同様だ。しかし、派生語が多々あり、例えば「安全係数」「安全率」のごとく、安心の「ところ」というより、数値化が可能な理論上のことと言える。

例えば、防御堅固で豪華な家に住み、十分な資産があって、人生悠々と思える生活であっても、「安心」ではないと思う人も少なくなろう。

「格差」が問題になっているが、ビジネスマンとして世界を観察してきた目には、日本ほど平均して(物質的に)豊かで、安全な国はない。ことほど左様に「安心」とは、すぐれて人のこころの内面の問題だ。

さて、その「安心」を揺るがす「危険性」への懸念。

- 1) ほぼ確実に起こる可能性、
 - 2) 確実にないが警戒すべき可能性、
 - 3) 否定はできないが警戒するほどでない可能性、
 - 4) 現実的にあり得ない可能性。
 - 5) 絶対にない可能性。
- と段階があろう。

4) 5) については、しかし、神ならぬ身、「想定外」、つまり我々人間に出る幕はない。

参照：Force Majeure：偉大な力

「Globalizationこそ諸悪の根源」とする「識者」もいて驚かされるが、いずれにしてもTPPがあろうがなかろうが、日本が貿易立国である以上、「(仕事で)使える英語力」の向上は避けて通れない。

以上、拙稿「TPP賛否論、再点検」より、抜粋、加筆。

書評

『世界を変えた10冊の本』 池上 彰 著 (文藝春秋)

澁 谷 義

『著者は、元NHKキャスターで、現在フリージャーナリストとして活躍している。読み応えがあったが、印象に残った事項を中心に読後感をまとめてみたい。

(1)「アンネの日記」:

英文でも読んだが、最も印象に残っている本である。ナチスによるユダヤ人に対する弾圧で、オランダのアムステルダム隠れ家でのアンネ・フランク一家の厳しい生活。その模様が13～15歳の多感な少女・アンネによる日記に克明に記されている。ポーランドのアウシュビッツ強制収容所での残酷な最後は涙なしには読めない。

(2)「聖書」:

世界で最も読まれた本。旧約聖書と新約聖書の二種類がある。旧約は全39巻、新約は全27巻と膨大である。

ローマ帝国の国教になって、キリスト教は爆発的に信者を増やした。カトリックの教えに反発した人たちによる宗教改革でプロテスタントが分離した。

(3)「コーラン」:

イスラム教徒は「アッラーの神」を信じる。アッラーとはアラビア語で神様のこと。イスラム教は「コーラン」を最も大切な教典にした。神は、ムハンマド(マホメット)を預言者に選び、彼に最期の神の言葉を伝えた。これが「コーラン」である。イスラムとは、帰依するという意味である。

ジハード(聖戦)で死んだ人は、例外的にすぐに天国に行ける。アッラーのために死んだ人である。コーランでは、イスラム教徒が守るべき5行として、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、メッカ巡礼をあげている。男だけが戦死し、増えた未亡人や身寄りのない孤児を救うべく、最大4人まで妻をもつことを許した。ただし、全員平等に接しなければならないとは、大変?!

(4)「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」:

ドイツのマックス・ウェーバーが書いたもので、宗教が経済に与える影響を分析し、世の人々を驚かせた。16世紀のドイツのマルチン・ル

ターによる宗教改革で、プロテスタントが生れた。プロテスタントの国で資本主義が発達した。プロテスタントが米国に渡ると「職業の義務」だけが残し、宗教的なバックボーンは消滅した。

(5)「資本論」:

カール・マルクスは資本主義がなぜ非人間的な経済体制になるかを説いた。マルクス理論は、ロシア革命を引き起こした。マルクスの資本論は世界を変えた。

ところが、東西冷戦が終わり、ソ連の崩壊で社会主義体制は限界を迎えた。それが、リーマン・ショックで、マルクスは預言者のように復活するとは、皮肉な話であると、著者は解説している。

資本家が労働者から、給料以上に価値のあるものを作り出すことを、搾取とマルクスは指摘した。

(6)「イスラーム原理主義の道しるべ」:

イスラム教を極端に解釈した理論書でエジプトのサイイド・クトゥブが著した道標である。オサマ・ビンラディンもこの書を読み、大きな影響を受けた。クトゥブは「イスラムこそが全人類を導く救いだ」と主張した。

(7)「沈黙の春」:

アンネの日記と並び、最も感動した著書である。レイチェル・カーソンは女性科学者で、米国商務省漁業局に勤めた。1962年雑誌「ニューヨーカー」に、「沈黙の春」を連載、単行本として出版しベストセラーになった。DDTの危険性を訴えて、DDT使用が禁止になり、DDTの汚染から世界を救った。日本でも朝日新聞社連載の有吉佐和子著「複合汚染」で、「沈黙の春」が紹介され大きな影響を与えた。「ダイオキシン」や「環境ホルモン」も話題になった。今や放射能汚染が深刻な問題である。

(8)「種の起源」:

1835年、南米のガラパゴス諸島を訪れたチャールズ・ダーウィンは、進化論を考えるヒントを得た。1859年「自然淘汰による種の起源、生存闘争における有利な品種の保存」という題名で、出版した。ダーウィンの自然淘汰の進化論に、カール・マルクスは触発された。

(9)「雇傭、利子および貨幣の一般理論」:

ジョン・メイナード・ケインズにより、1963年に出版され、世界の経済学者に多大な影響を与えた。積極的な財政支出を進め、マルクスの予告した恐慌を未然に防げた。

ケインズの「乗数効果」を知らないで、菅首相は国会答弁で議事ストップした。古代エジプトのピラミッド建設は、ケインズ理論を実践していた。

ケインズ経済学は、第二次世界大戦後の主流経済学として定着した。不況も軽くて済み景気は回復できたが、インフレ傾向が根付いた。行き過ぎた金儲け主義が、2008年のリーマン・ブラザーズの経営破綻を招いた。現在のユーロ圏の危機的状況は深刻である。

(10)「資本主義と自由」:

米国の経済学者ミルトン・フリードマン教授により発表された。リバタリアニズム（自由至上主義）と呼ばれる。民間企業の活力、市場経済の効率性に信頼を置き、変動相場制を提唱した。その先見性に驚かされる。1967年、フリードマンはノーベル経済学賞を受賞した。

大学で、商学と経済学を学んだ。上記の経済学の書物は当然知っていた。十分理解できていたと胸を張りたいところだが、果たしてどうか？ 10冊の書物は、世界の歴史に大きな影響を与えてきた。日本・中国などアジア諸国の書籍が上げられていないのが、寂しい。論語、日本の古典である源氏物語、徒然草や仏教関係の書籍の解説も欲しかった。

『人生に何一つ無駄な物はない』 ～幸せのための475章～

遠藤 周作 著(海竜社)

著者の遠藤氏は1923年生まれ、「白い人」で芥川賞受賞。1996年急逝された。狐狸庵山人を名のりユーモアのある小説やエッセイで知られていた。カトリック信者。

60歳の少し前に自分の人生をふりかえて「今のぼくにとって何ひとつ無駄なものは人生になかったような気がする」と呟くことができる気持ちになった。

挫折も失敗も病気も失恋もプラスにしようとするればプラスになっていくのだ。そのプラスにする知恵を教えるのが、本当の教育だと思う。病身でなければ傲慢な男であり続けていたかもしれないという。

上記が本書エッセイ題目の要旨であるが如何？

本当の夫婦愛とは、お互いの夢が破れたところに情味、情愛を感じ、それをスルメのように噛みしめてできる。夫婦はその長所で支えあっていると同時に、その欠点で支えあっている時が多いともいう。

復活というのは蘇生とは違う。イエスの死後、キリスト(救い主)という形で生き始めた。神という大きな生命の中で生前よりも息づいて、後の世まで生きていく。これを復活と言ったと思うと、信者の著者らしい解釈である。

宗教には「父なる宗教」と「母なる宗教」がある。「母なる宗教」は、悔いたものを許し、愛してくれる。日本では旧約の神のように悪を責める父なる宗教は育たず、母なる宗教が栄えた。戦場で多くの日本の兵士が「お母さん」とつぶやいた心

境につながる。

カトリックでは自殺を禁じている。苦しいものでも決して捨てずに守りつづけるカトリックである。日本人は特定の宗教を信じていないが、「家族教」という宗教を持っている人が多い。

自分の人生をふりかえるとどうも照れくさいが、素敵な女の友人たちを持つ幸運に恵まれた男だった。母親との関係をふくめて、現実だけに埋没しようとする著者に現実を止揚する世界を指さし、人間の優しさを与えてくれたという。一方、女のスサマジサにも遭遇することがある。先天的に嫉妬が発する女同士の悪口である。

妻との出会いを含めて、人と人とのめぐりあいは、神秘的意志が働いているという。人生には、本人の意思を超えた力が働いているのだろうか？

小説家の著者は、自分の心や人間の心を覗きこむことを仕事としている。人生のなかで何よりも我々がもてあますものは心である。

男が女に言い寄る。相手の自尊心を傷つけないで断わる。一番うまいのはフランス人だと思うと。ユーモアがないということは、心の余裕がないことである。

以上、本書のエッセンスを紹介してみた。著者の最期の作品は「深い河」である。キリスト教の復活を、日本的な輪廻転生に当てはめて描いた。著者は腎臓が悪く人工透析を続けていた。三年半に及ぶ入院で苦しみに耐えての壮絶な死に様であったと長男は語ったと、鈴木秀子さんはその様に解説している。

数十年ぶりの邂逅 — 鳥羽旅行 —

大 平 栗 雄

2012年3月29日、ニチメンOB 10名が夫々、東は東京・横浜から西は神戸、大阪、京都から伊勢志摩・鳥羽のエクシブ・ホテルに参集しました

メンバーは昭和40年前後のニチメン大阪中之島本社輸出機械部産業機械課 (OS/MCS) で机を並べていた皆様です。

当時大先輩として、ご指導頂いた辻井準一さん、澤田太郎さんはじめ下記写真に写っておられるお懐かしい方々です。

昨年、川西勲さんのお世話で、はじめて箱根に集ったOS・MCS OB会の拡大版として、今年は、辻井さんのお世話で景勝の地、鳥羽の超デラックスホテルにて、雰囲気良し、サービス良し、料理良しで、自ずと会は盛り上がりました。

皆、大阪中之島オフィスを起点として、夫々が海外に雄飛して、実に思い出深い、しかも波乱万

丈なニチメンマン生活を送り、今はそれを懐かしく思い起こす心の余裕が出て来たともいえます。

まず元気に、こうして皆さんと集い、談笑できるのが何よりの幸運であります。

今回は、鍵本孝三さん、須佐和夫さん、大平と初参加です。

鍵本さんは、ニチメン退社後、日立工機(株)へ移られてて、社長・会長・相談役を経て昨年引退された由。

私と同期の須佐和夫さんは、いま脚光を浴びているミャンマー市場にて赫々たる成果を挙げられるようです。

その他、お集まりの皆様のご活躍振りは、言うまでもないことです。

再会の興奮冷めぬままに、また来年の再会を約して、夫々、家路に着きました。



写真向って左から ; (敬称略) 鍵本孝三、大平栗雄、長谷川洋、小橋雅寛、
本田 努、澤田太郎、辻井準一、川西 勲、須佐和夫、泉 伸夫。

【フォト・ストーリー】ニチメン宝塚独身寮・社宅周辺は今

松 尾 哲 雄

1958年（昭33）創設の宝塚の逆瀬川独身寮は、50年経った今も我等の青春の思い出の地である。

其処を出て、内外で活躍した我等ニチメンマンの将に濫觴の地である

『歳歳年々花相似たり、歳歳年々人同じからず』だが、果たして、逆瀬川は『松柏がぐだかれて薪となり』

『桑田が変じて海』となって居るだろうか。“逆瀬川周辺の今”を下の写真で、ご覧下さい。

逆瀬川の流れは変わらず、されど独身寮も、社

宅も今いずこ？の風景である。

◎昭和33年宝塚独身寮の同期生を茲に記して、往時を偲ぶ縁としたい。

堀之内敬、花崎俊雄、神田剛太郎（久大）、故土岐喜一、高橋正、菊澤淳、菊池省三、長谷川洋、大場禎治、大谷毅丈夫、故因幡忠顕、埴生栄勇、小橋偉男、長嶋某、湯浅某の諸兄も今や“白頭を悲しむ翁”の年齢になった。



逆瀬川



宝塚大橋より望む



宝塚独身寮跡



宝塚社宅跡

太田昭さんのご逝去を悼む

宇 治 田 薫



2000（平成12）年3月3日
旧ニチメンビル34Fでミレニアム合同句会の座長
をつとめる故太田昭さん

2012（平成24）年2月2日早朝、太田昭さんが急逝されました。享年84歳でした。ご自宅で就寝中の異変で、誠に悲しい事乍ら、急性心筋梗塞との事です。

思えば太田さんとのご縁は、筆者がニチメンに入社した1956（昭和31）年、大阪本社の同好会・バレー・ボール部に所属した事に始まりました。太田さんはリーディング・プレイヤーとして部員羨望的でした。

業務上の進路は夫々異なり、記憶を辿りますと順序不同乍ら、太田さんは金属鉱産部を初め、社長室・総合企画室、財務本部、燃料エネルギー本部、海外では印度・甲谷陀、米国・紐育、欧州・倫敦、関連会社では東部製鉄㈱、㈱ニチメン保険センター等の内外各部門を歴任され、社員としての役員として社業の発展に尽力・貢献されました。

筆者は繊維、人事、泰国・タイナイロン社の各部門に勤務した為、業務上ご一緒する事はなかったのですが、期せずしてお互いにニチメン勤務の晩年に至り、㈱ニチメン保険センターの職場で一緒になり、直接お仕えする事となりました。同社に勤務中の筆者に太田さんが同社社長にご就任直前、「着任に際し打ち合わせしたいので、事務所の近所で会いたい」とのお電話を頂きました。「保険会社と代理店の関係、経営や営業上の実態、問題点等」に就き、詳しくお話する機会を持ちました。そして、ご着任後は社長にご指導頂きますと共に、社長補佐として社業に専念してご縁が一

層深まる事となりました。

保険センターは従来大阪ベースの処、太田さんのご就任により初めて東京ベースでの経営となりました。積極的でスマートな且つ明朗なお人柄は一気に社内の雰囲気を変え、補佐する立場の筆者も意気投合する事となりました。

資本系列の締め付けが厳しい保険勧誘の業界だけに、新規客の開拓には苦労の連続でしたが、お顔の広い太田さんの人脈を辿り、お伴しては保険勧誘の拡販に奔走する日々が続きました。かかる状況下、東京海上火災保険㈱（現東京海上日動火災保険㈱）から、同社担当部門傘下の二百余社の代理店会会長就任の要請があり、他社の後塵を拝していた要職を初めて太田社長が引き受けられ、委嘱される事となりました。我々社員一同もワンランクアップした様な励みと自信を抱く程でした。

又ある時には、他の大手保険会社から同社内の管理職研修の講師の依頼に応え、商社としての保険代理店業務の実態や経営等に就いて熱弁を振るわれ、満場の受講者から溢れんばかりの拍手を受けられる事もありました。

好況とも相俟って業績が順調に推移する中、元号が改まった1989（平成元）年1月、突如太田さんから俳句の会を結成したいとお申し出があり、社内を初め生損保会社の当社担当者をも含む数名が参加して句会が発足、素人ばかりの集まりである事から社友会々報でも掲載中の「いろは句会」と命名されました。多忙な業務の傍ら、放課後俳句の基礎講座を皮切りに句会が開催されました。

ニチメン百年誌に記述の「高浜虚子の直弟子でホトトギスの毎号に投稿され、俳号・圭児で著名な福井慶三元社長」の手ほどきを受けられた、謂わば門下生のお一人である太田さんから、俳句の基本については厳しくご指導頂きました。

一方、単に俳句を楽しむだけではなく、保険ビジネスとも渾然一体となって活動されました。即ち、或る時は顧客開拓にお伴する際、先方の社長が俳句に造詣が深いとなると新刊の一寸した歳時記を手土産に保険勧誘に供されるといった具合で、ビジネス展開にも俳句熱が籠っておられ、相互に意気投合して文化的交流を深められる情緒豊かなお人柄でありました。

折しも日本が大幅な貿易黒字を計上し、輸入促進の国策を遂行する専門家を募集していたジェットロにご推挙を受け、幸いにも筆者の採用が適う事となりました。そして、アジア地域に金融危機が勃発した翌1998（平成10）年9月、経済支援の為、泰国商務省内に半年間勤務する事になりましたが、ジェットロ勤務の当初から引き続き旬会に所属する事を認めて頂き、同国に滞在中も月例会会に郵送で投句参加し、又太田さんからその結果の一覧書類を現地まで郵送頂く等、心温まるご親切に感激するばかりでありました。

句会は社内関係ばかりではなく、太田さんの大阪商大(現大阪市立大)時代の同級生グループの他、都内、群馬、神奈川、大阪の各地での取引関係や

人的交流関係の数グループの句会も主宰され、いろは句会との交流を図られる等超多忙な俳句人生を満喫しておられました。田町の旧ニチメンビル24階食堂を拝借して、太田座長のもと上記句会の交流大会を主催された事もありました。

又、喉自慢も確かな太田さんは童謡がお好きで、時折ご一緒にハモル事もありました。愛妻家であられ、会社では入れ替わり立ち替わり太田さんを慕っての来客が多く、兎に角、幅広いお人柄の大先輩が昇天された事は唯々痛恨の極みであり、追憶の果てる事はありません。茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げつつ、追悼の寄稿と致します。

合 掌

[illegible]

内藤謙二さんの思い出



1962.12.11内藤部長送別会（新橋中国飯店）にて
前列左から5人目が故内藤謙二さん。
左から2人目は日比野元社長・会長

石川博保

3月22日、娘さんである小松邦子さんから電話あり、お父上の内藤謙二氏が、本年1月20日に死去されたとのこと。60日も過ぎた後の電話故、私も戸惑いました。

連絡がこんなに遅れたのは、内藤夫人が入院中、小松さんがその看護等で体調不良。ご本人はお元気にデイケア・サービスによく通っておられた。

1月17日に、転んで大腿骨の損傷。1月20日昼に手術の件で病院と打ち合わせ予定だった。その日の朝、病院から電話で、その日の朝、亡くなったとのこと。葬儀は家族葬。すべて終わってました。

近三ビルで、東京木材部が出来たのが、昭和33年とのことですが、昭和38年始めには初代東京木材部長から、建設部に移られたゆえ、内藤部長時代一緒に仕事した部下は、今はかなり少ない。当時の課長さん年代の方は、多く既に鬼籍にはいり、

昭和34~37年入社の我等世代と、松尾さん世代のごくわずかな人たちです。ニチメン卒業後の接点はかなりあり。私や、木材の皆さんも、当然100歳はクリアすると思ってました。

この10年くらい、東京近辺居住の木材ＯＢで、毎月、最近は一カ月おき昼に集まって、飲んで食べてがやがや話をしています。この会にも、最後は小松さんが往復つきそって、参加された。そのあとも、幹事の私に切手何枚も送ってきて、自分はＰＣないから例会の報告を送ってくれと、非常に熱心でした。

耳が遠く、電話での会話は殆ど不可能でした。

その後、町田近辺にこちらが出向き、数人で内藤さんを囲んで、食事会をしました。

カメラが好きで、町田の市民会館の作品展に大きな内藤作品が展示され、確か、埴生さん、廣田さんと私で見に行ったこと懐かしく覚えています。

見た後は、どこかでお茶とケーキを御馳走になったと記憶しています。

非常に、明るく積極的で、遠慮なく本人も言うけど、こちらも言い返せる懐かしい方でした。

ご冥福を祈ります。

松 尾 憲 一

内藤さんの訃報、驚きと悲しみを持って受け取りました。今はただただ安らかなご冥福をお祈りいたします。

内藤さんは同志社大のボート部で鍛えられたただ

けに丈夫で上背もある方でした。

70代、80代では10歳ぐらい若く見えるほど元気に日常生活を過ごしておられ昨年は木材部OB中の最高齢者になられ私たちは尊敬と百才男を期待しておりましたので目の98歳でのご他界まことに残念でなりません。

私は木材部在籍は12年(30年ー42年)ご一緒したのはその間の8年ですがお互いOBになってからが長く20年以上の付き合いでした。あの親しみ易さと喜怒哀楽の怒を決して表さず持ち前の大声ボヤキで皆を納得させておられたお姿が懐かしい。ひとつ言っておきたいこともあります。木材部を愛しその目覚しい発展を心から喜んでおられた人を定年が目前なのに建設部に異動され私は遠くモスコーにありて聞いたときはどおして木材部で卒業していただけなかったか怒りがこみあげました。

また私がフィリピン駐在時ラワン材の産地で伐採地の山から海上の本船に積み込むまでの現場を案内した折、これは大変な命がけの仕事だ、命は大事だ決して無理はするなと言われた優しさも心に残ります。人付き合いも良く媚びず驕らずストレイトな性格を通した一生だったと想います。

決して忘れません。有難うございました安らかにお休み下さい。

伊 藤 安 雄

世話人の石川さんから「内藤さんが亡くなられた」との連絡を戴いた時には本当に吃驚しました。

あの元気な、そして口は悪いが明るい性格で誰にも好かれた内藤さんならまだまだ社友会の最長老を続けて戴けるだろうと期待してましたが、100歳は内藤さんでも無理だったかとこちらまで落ち込んでいます。

内藤さんは、昭和32年、部長の林正男さん以外はすべて若手という木材部へ来られました。

行動派で、兎に角外での仕事が好きで、来た翌日には輸入係りの者と貯木場へ行かれたのを今も覚えています。

当時、私は輸出係、大久保海生さんとのコンビで、主に米国向け合板輸出で、オフィスでの仕事が多く、結果、外出勝ちの内藤さんのご指導はあまり受けられませんでした。

20代の二人が信頼されたものと思っておりますが果たして如何？

昭和33年に出来た東京木材部の最初の長(肩書きは副部長)として東京へ赴任されましたが、その少し前に松尾憲一さんと一緒に東京へ出張し当時業界を牛耳っていた三井、安宅の得意先を訪問、見事ニチメンの得意先にしたのは持ち前の行動力と明るい人柄の賜物であったと思います。

あれこれ、思い出は尽きませんが、今はただご冥福をお祈りする次第です。

合掌

稲 垣 基 直

内藤さんの訃報、お知らせ有難うございました。

石川さんのお誘いで出席させて戴いた内藤さんを囲む昼食会(町田市鴨川)が大変楽しかったこと、今でもはっきりと覚えております。

あれは7年前の5月21日でした。その後も、内藤さんから「もう一回やってくれ」と云われて石川さんが苦勞されたこと記憶にあります。

内藤さんは正に典型的な「大正男」で、独特の風格の持ち主でした。

私がマニラ駐在の時、内藤さんが出張で来比され、Mr.Dionisioから自宅へ晩飯に招待された時、「俺はトロピカルな国へ来たんだから」と云って、他の駐在員がスーツにネクタイをしているのに、主賓の内藤さんは開襟シャツのアロハスタイルで押し通されたことを思い出します。

又、内藤さんは大阪木材部の課長さんの頃に、名古屋まで得意先との値決め交渉に来て戴きましたが、「弁舌さわやか」と云うよりは、粘って粘って粘って相手を根負けさせるタイプだったと思います。

そして宴席では静岡で覚えたという「茶切節」が得意で、「歌は茶切節、男は次郎長」と歌った、ややハスキーな声は今でも耳に残っています。

あの粘りで長寿を全うされた懐かしい内藤さんのご冥福をお祈り申し上げます。

佐 藤 守

内藤さんは、ニチメンを退社されたあとも木材関係の会社に勤めておられました。

ある木材会社にいたころは、木材部にも来られ、<尾形君、木材売ってくれよ。

それに対し、いいですよ、現金ならばとの返答>とかの話があった事思い出します。

その後その会社は、案の定、倒産しました。それから、外資系会社(シッパーエージェント)にも在籍し、佐藤君、木材製品買えよとか言われたりしました。

実際取引もありました。クレームなどあったが、うやむやにされた記憶もあります。

その後、かなり高齢になっても、佐藤君、おれを雇ってくれ。給料はいらない。但し、おれに営業をやらせてくれ。(ニチメン建材の時)そんな話もありました。

本当に元気な人でした。木材の商いを本当に愛してたと思います。ご冥福をお祈りします。

【編集後記】

本年初頭に映画“ニーチェの馬”の監督タル・ペーラは、映画について、「普遍的な事実を描いただけだ。死なない人間はいない」、または「世界は変わらない。四季が移ろうだけだ。時は過ぎ、だんだん弱っていく。」と述べている。(日経)。

会報の編纂を始めて、はや6年、ここに第12号が出る。高木亨一、倉持次雄両世話人の強力なコラボによって今日まで持ったといえる。

冒頭の引用の如く、死なない人間はいない。前号より数えて6ヶ月、またまた物故者リストに多くのOBが名前を連ねています。東西合わせて18名。今や、あの世の方に先輩、友人、知己が多く集まってしまった。

今号には、OB最長老だった内藤謙二さんと太田昭さんのお二人の追悼文が寄せられた。

その他、思い出の深い人も多く居られ、慎みて哀悼の意を表します。

尚、当会の草創期に大変ご尽力くださった故岩田昭二元副会長の三回忌を終えて、『追悼文集』が近々発行されます。なんとニチメンOB61名の方がたが寄稿されている。61名夫々が語るニチメン小史のような側面もあります。

シェークスピア学者の小田島雄志がいいことを言っている。(日経・私の履歴書)；『死を前にして人生をふり返ったときに、おれは幸せだったと感じるのは、金や名誉でなく、おれはこんなに笑って泣いたりしたぞ、という喜怒哀楽の情の総量によってだ。』と。

これからの残り少ない人生、喜びと、楽しみは最大化しようと思う。

その意味で、今号における多くの寄稿文は示唆に富んだ佳作が多く、有り難い事です。

(長谷川 洋)

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂2-14-27
双日(株)内 東館17F

発行人	；倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	；長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	；高木 亨一	世話人
	倉持 次雄	世話人
印刷所	；(有) 関 内	印刷